

和歌山県名匠表彰 50 年の歩み

—— 歴代受賞者の功績 ——



和歌山県

目次

昭和 49 年度	1 ~ 3	平成 13 年度	58
昭和 50 年度	4 ~ 6	平成 14 年度	59 ~ 60
昭和 51 年度	7 ~ 9	平成 15 年度	61 ~ 62
昭和 52 年度	10 ~ 11	平成 16 年度	63 ~ 64
昭和 53 年度	12 ~ 14	平成 17 年度	65 ~ 66
昭和 54 年度	15 ~ 17	平成 18 年度	67 ~ 68
昭和 55 年度	18 ~ 20	平成 19 年度	69 ~ 70
昭和 56 年度	21 ~ 22	平成 20 年度	71 ~ 72
昭和 57 年度	23 ~ 25	平成 21 年度	73
昭和 58 年度	26 ~ 28	平成 22 年度	74
昭和 59 年度	29 ~ 30	平成 23 年度	75
昭和 60 年度	31 ~ 32	平成 24 年度	76
昭和 61 年度	33	平成 25 年度	77
昭和 62 年度	34 ~ 35	平成 26 年度	78
昭和 63 年度	36 ~ 37	平成 27 年度	79
平成元年度	38	平成 28 年度	80
平成 2 年度	39 ~ 40	平成 29 年度	81
平成 3 年度	41 ~ 42	平成 30 年度	82
平成 4 年度	43	令和元年度	83
平成 5 年度	44 ~ 45	令和 2 年度	84
平成 6 年度	46 ~ 47	令和 3 年度	85
平成 7 年度	48 ~ 49	令和 4 年度	86
平成 8 年度	50 ~ 51	令和 5 年度	87
平成 9 年度	52	和歌山県名匠表彰者一覧（年度別）	88 ~ 90
平成 10 年度	53 ~ 54	和歌山県名匠表彰者一覧（地域別）	91 ~ 93
平成 11 年度	55	和歌山県名匠表彰者一覧（職種・分野別）	94 ~ 96
平成 12 年度	56 ~ 57	和歌山県名匠表彰者一覧（50 音順）	97 ~ 99

■凡例

受賞当時の功績録を再掲する。ただし、一部誤字等の訂正を行い、個人情報をご省いたところがある。

昭和 49 年度 和歌山県名匠

か わ い とういちろう とくすけ
河 合 藤 一 郎 (改 名 篤 亮)

◎ 職歴

叔父の鳥井齊氏に蒔絵入門
(大正 3 年～大正 9 年)
河合商店自営 (大正 10 年～現在)

◎ 業績の概要

大量生産されている漆器業界にあって、
伝統工芸、特に鏝上蒔絵さびあげまきえの技法を守りなが
ら更に研究を進め、新技術を開発するなど
業界の指導的な役割を果たしてきた。

12 才のとき叔父の鳥井齊氏に師事しつげい、漆芸
の道に入った。大正末期東北地方を視察し
てから鏝上蒔絵の魅力に引かれ研究。

改良を重ねながら独特の手法を創作。“鏝
篤とく”の異名で呼ばれるほどで蒔絵意匠さびの保
存と開発に貢献している。鏝上蒔絵の技法
はもちろんのこと、他の蒔絵技法について
も自分の知るかぎり公開するので、同氏を
慕う絵付師が多く、その技法の影響をかな
り受けている組合員が多い。

伝統的な技術、技法が再評価されている
昨今、その後継者の育成にも尽力している
氏の存在は貴重である。



職 種：蒔絵師まきえし

住 所：和歌山県海南市

生 年：明治 36 年

昭和 49 年度 和歌山県名匠

もく しん ぞう さとう
空 真 藏 (旧姓 佐藤)

◎ 職歴

宮大工見習

(大正 4 年～昭和 2 年 うち兵役 3 年)

空工務店自営 (昭和 2 年～現在)

◎ 業績の概要

多年にわたり文化財建造物の修復工事とその保護及び後進技能者の育成指導を通じ和歌山県の文化の向上発展に貢献。

紀州藩普請方十代目佐藤秀吉（実父）氏に師事した。佐藤家の三男として生まれたので、母方の同業者空家七代目の相続人として養子入籍し、14 才のときから厳格な実父にたたき込まれ宮大工を唯一の天職として働き続け、“ぶんまわし”と“さしがね”のみを使って建築する宮大工の伝統技術である規矩術を修得した。

和歌山市梶取の総持寺の講堂をはじめ、田辺市の高山寺多宝塔、東光寺の鐘楼、蟻通神社の社殿など数多くの神社仏閣の修築を手がけるなど、本県文化財保護に貢献している。

昭和 26 年には、独学で一級建築士の資格を取得するなど、その豊富な知識と経験を生かし後進の指導育成にも努めている。



職 種：宮大工

住 所：和歌山県田辺市

生 年：明治 34 年

昭和 49 年度 和歌山県名匠

やま だ いわ よし

げんかん し

山 田 岩 義 (竿銘 源竿師)

◎ 職歴

大工見習 (大正 14 年～昭和 6 年)

大阪「竿五郎」製作所入門見習

(昭和 6 年～昭和 9 年)

制竿業自営 (昭和 9 年～現在)

◎ 業績の概要

グラス・ロッド竿がはばをきかせているなかで、和歌山の橋本市周辺でしか作れないへら^{ふなざお}鯛竿の最高級品を製作、伝統ある県特産品として釣仲間のみならず広く鑑賞用としても賞賛されている。

昭和 6 年大阪の「竿五郎」製作所に入門、約 3 年の修業を経て橋本市で製竿業を営んでいる。

銘は「源竿師」、マニアからの注文品が多いので、客の好みと合った竿を作る材料を選ぶ目が必要である。

魚をあしらう竿、それは名刀のように折れず曲がらずそして美しい伝統ある紀州竿で、広く釣仲間や業界に知られている。

昭和 17 年と昭和 46 年の 2 回、天皇陛下に献上、喜ばれるとともに、万国博覧会には和歌山県特産品として出品した。

国内で唯一カ所だけとなった紀州竹竿の伝統を守るため、後進の育成指導にも尽力している。



職 種：製竿師^{せいかんし}

住 所：和歌山県橋本市

生 年：大正元年

昭和 50 年度 和歌山県名匠

みや じま しょうた ろう

宮 嶋 正太郎

◎ 職歴

徳川家御用達の第 18 代仏具師の家に生まれ、14 才でこの道に入る。

三輪仏具店に勤務(明治 42 年～昭和 3 年)

仏具店経営(昭和 4 年～昭和 20 年)

才駒工芸に勤務(昭和 28 年～現在)

◎ 業績の概要

14 才の時、親戚の三輪仏具店でこの道に入り、以来 40 余年この道一筋に励んできたが、昭和 28 年から主にらんまの製作に取り組んでいる。

らんまは設計者の意をくみながら、下から眺めていかに限られた厚みで立体感を出すかということに苦労があり、^{はぼ}市の広い寺院のらんまは特に難しく、市内では湊の海善寺、和歌浦の養泉寺などのらんまを製作し、その伝統を伝えてきたが、現在ではらんまに金箔を貼れるのは氏だけとなった。

才駒のらんまは関東流と関西流の相違があるなかで、独特のらんまを製作しているが、氏はその伝統を守りながら新しい技法を研究した成果が認められ、昭和 46 年皇太子、皇太子妃両殿下がご来県された時、すかし彫りの実技を披露した。

また、昭和 35 年には優良従業員として和歌山市長から表彰を受けている。



職 種：らんまづくり

住 所：和歌山県和歌山市

生 年：明治 29 年

昭和 50 年度 和歌山県名匠

やま もと こう た ろ う

山 本 幸 太 郎

◎ 職歴

家業の家具製造に従事するかたわら祖父から受け継がれた山幾天神ならびに御坊獅子の製作技術を習得し、現在まで50余年祭礼獅子頭の製作を続けてきた。

◎ 業績の概要

御坊獅子は祭礼獅子頭として、その優美な姿は名声高く、県内は言うに及ばず全国各地からの注文が多いが、8～10月の期間でないと張子のため乾燥が思うにまかせず、そのうえ手づくりによるため、日高地方からの注文に限って、年に6～7個製作している。

獅子頭は良質の和紙を糊で固め、うるしで仕上げた赤色、黒色の二種類であり、昭和初年、初代山本幾右衛門氏が技術を習得し、2代目亀太郎氏を経て3代目幸太郎氏が伝承しているが、早く4代目に引き継ぐべく努力している。

日高地方の祭礼は数多いが、代表的なものは由良町横浜の獅子舞と美山村（現：日高川町）の寒川祭（獅子舞）であり、ともに和歌山県無形文化財に指定されている。それぞれ、その雄壮さと妙技は、氏の製作した重量の軽い獅子頭でないと演じにくいと言われる。

初代から今日まで、採算を度外視して作り続け、伝統の祭を支えてきた裏方的存在の氏の力は大きい。



職 種：獅子頭づくり

住 所：和歌山県御坊市

生 年：明治36年

昭和50年度 和歌山県名匠

わか ばやし つね たろう

じょうばん

若林 常太良 (号 常盤)

◎ 職歴

15才でこの道に入り、高野山をはじめ、県内各地の寺社の灯ろうや仏壇、門などの飾り金、樋の角飾りを作り続けてきた。

◎ 業績の概要

神社や寺の銅製灯ろうを作り続けて70余年、その伝統を守りながら新しい考案などもしている。

15才の時、和泉市の田中安兵衛氏に師事し、約4年修業の後自営したが、氏は趣味が広く写真や生花をたしなみ、花は師範、写真は写真機を自作し、灯ろうや角飾りなどを写して研究を続けるとともに、高野山の常喜院、海南市の宇賀部神社、大神神社などに灯ろうを奉納した。

最近では、仏教が世界の成り立ちをのべた「空・風・火・水・土」を表現した灯ろうを考案し、常盤形と名付けその製作に精魂を傾けている。特に屋根は関東方面の美しい屋形からヒントを得ている。

この美しさと精巧さが認められ、昭和50年には貴志川町（現：紀の川市）の無形文化財の指定を受けている。

後継者もなく、おそらく県内ではこの人のみであるので二代目の養成が望まれる。



職 種：灯ろうづくり

住 所：和歌山県那賀郡貴志川町（現：紀の川市）

生 年：明治16年

昭和 51 年度 和歌山県名匠

かた ぎり じゅんの すけ

片 桐 順之助

◎ 職歴

父の代からの番傘づくりを受け継いで、60 余年紀州番傘をつくり続けてきた。

◎ 業績の概要

徳川城下町の浪人が番傘づくりの手内職をしたことが、紀州番傘を発展させたといえられ、最盛期には 200 軒近くの業者があり、年産 150 万本を製作したといわれている。

しかし、今では片桐氏父子のただ 1 軒となり、月産 300 本余りとなっている。

傘づくりの工程は骨ためから仕上げまで 7 工程あるが氏は一番重要な仕上げ作業を行い、色付け、傷見、油引き、ぬりまる、二番掛けと全くの手仕事ばかりで採算を度外視して海南市の伝統産業を守ってきた。

家業はこの番傘を含めた洋傘の販売で、製品は旅館関係、高野山の寺院、映画・テレビの撮影用に利用されるほか民芸品収集家や外国人等に珍重されている。



職 種：番傘づくり

住 所：和歌山県海南市

生 年：明治 30 年

昭和 51 年度 和歌山県名匠

かわ かみ とし お
川 上 敏 夫 (刀銘

なんきかわかみりゅうしきよみつ
南紀川上竜子清光)

◎ 職歴

昭和初年頃から同 11 年まで父の川上文三郎（清秀）氏に師事し、その後宮口寿広、宮口恒寿氏に学び現在に至っている。

◎ 業績の概要

12 才の頃から刀匠を志して先代清秀氏に師事し、鍛刀や梵字、棒樋など刀身彫刻を修業、戦時には軍刀を作るなど終戦まで作刀に専念した。

戦後の刀剣製作禁止時代にも他の刃物製作に転業せず刀の研究を続け、今日まで刀一筋に取り組んでいる。

鍛刀はもとよりはばき、白鞘、研ぎなど刀に関する一連の技術を習得している数少ない刀匠の一人である。

昭和 40 年文化庁登録刀匠となり、昭和 41 年には財団法人日本美術刀剣保存協会主催の「新作名刀展」に初出品して入選以来、6 回の入選を重ねている。

また、氏は日本美術保存協会会員であるとともに那智勝浦町文化財審議会委員の要職にある。



職 種：刀匠とうしょう

住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

生 年：大正 2 年

昭和 51 年度 和歌山県名匠

た なか しょう すけ
田 中 正 助

◎ 職歴

農業のかたわら祖父田中庄助、父田中豊太郎氏から受け継いだ御坊天神、鯛車などをつくり続けて60年、数少ない伝統ある郷土玩具を残してきた。

◎ 業績の概要

祖父庄助氏が大阪の張子人形の技法を取り入れ、御坊天神、夫妻だるま、首振り虎、鯛車などを考案して以来、三代にわたりその技法を伝承してきた。

父豊太郎氏時代には御坊市無形文化財に指定されていた。

製法には張子のほかひき粉、土、糊をこね合せてつくる練ものを考案し、御坊天神、三番叟、俵持ち、鯛えびす、鯛狎、虎加藤の6種類があるが、いずれも顔の表情が豊かで目に特長があり、原色鮮やかな色彩に特色がある。

御坊地方では昔から子供が生まれると初節句祝いの返礼として、男児には天神、女児には立雛を贈る風習があったが、今ではその風習も殆んどなく、愛好家や土産品として全国で愛好されている。



職 種：人形づくり

住 所：和歌山県御坊市

生 年：明治40年

昭和 52 年度 和歌山県名匠

つじ もと よし つぐ
辻 本 喜 次

◎ 職歴

昭和 7 年高野山金剛峯寺の建築に従事して以来 40 有余年、寺院建築の設計、施工に取り組んできた。

◎ 業績の概要

昭和 7 年和歌山工業学校卒業後すぐ、高野山金堂、大塔建設の主任技師大浦徳太郎氏に指導を受けた。

以来 40 有余年、寺院建築一筋に励まれ現在は、高野山孔雀堂の再建に取り組まれている。

氏のがけられた寺院は、他府県にも及び福岡県正行寺の納骨堂、鼓楼、経蔵、山門をはじめ、奈良県弁天宗の本堂、礼堂、宗祖殿、香川県屋島寺の開山堂、大阪府の犬鳴山本堂などがあり、本県では、高野山の英霊殿、奥の院御供所、専修学院灌頂堂、金剛峯寺阿字観堂のほか龍神村（現：田辺市）大應寺の本堂、印南町永福寺など各宗派の寺院を再建されている。

また、国の文化財である金剛峯寺の不動堂、徳川家霊台の修復をされるなど、文化財保護に貢献された功績は極めて大きいものがある。



職 種：宮大工
住 所：和歌山県伊都郡高野町
生 年：大正 2 年

昭和 52 年度 和歌山県名匠

ど い さだ たろう
土 井 定太郎

◎ 職歴

大正 2 年 15 才で橋本市谷上家の弟子に入門以来、檜皮葺を家業としてきた。

◎ 業績の概要

大正 2 年檜皮葺の道に入り今日まで 60 有余年、50 数社寺の屋根の修復監督に専念されている。

最近、氏がてがけた社寺には、京都府の相楽神社さがなかがあり、そのほか御霊神社、天満宮、東本願寺ちよくしもんの勅使門、京都御所の学問所、稲植神社いなう、奈良県生駒神社などがある。本県では、橋本市の天満神社、和歌山市の上小倉神社、梶取本山総持寺のほか、国の文化財であるかつらぎ町の宝来山神社ほうらいざんの修復をされている。

氏は、檜皮葺でも唐破風から は ふなどの重要部分を担当し、特に優美さが要求されるその伝統を守ってきた。

また、その豊富な知識と経験を生かし、後進の指導育成にも努められるなど、文化財保護に貢献された功績は極めて大きいものがある。



職 種：檜皮葺師ひ わだぶきし

住 所：和歌山県橋本市

生 年：明治 32 年

昭和 53 年度 和歌山県名匠

しば やす お
芝 安 雄 (本名 芝 安男)

◎ 職歴

本宮町皆地は、^{みなちがき}皆地笠発祥地といわれ数10戸の家で製造されていたが、この道40年余現在同氏だけが、この伝統をうけ継いでいる。

◎ 業績の概要

この地方で、いぞことよぶ茶摘み籠を作っていた父に、幼少より手伝いを通じてその技法を修得された。

昔はやはり、生活用品を中心に籠・蓑・笠等を作っていたが生活様式の変化により次第に民芸品へと変わりつつある。

なかでも茶道具としての^{はないけ}花活用、手付籠、掛花籠や炭取りは、注文に応じきれないほどであるが、特殊なものとして京都の聖護院・比叡山延暦寺の行者笠は、現在では、すべて同氏の手によるものである。

昭和 52 年植樹祭木まつりで両陛下に実演を披露されたほか、東京銀座の有名民芸店「たくみ」では、伝統ある民芸品の一つとなっている。

これらのことにより昭和 53 年県政功労者として和歌山県知事から表彰を受けられた。



職 種：^{みんげいひんせいさく}民芸品製作

住 所：和歌山県東牟婁郡本宮町（現：田辺市）

生 年：大正 10 年

昭和 53 年度 和歌山県名匠

にっ た りゅう ぞう

新 田 隆 造 (本名

にっ た かずお

新 田 和 夫)

◎ 職歴

昭和 2 年おじの岩下春吉氏に師事し、大阪唐木指物師の道にはいり昭和 13 年独立、昭和 30 年から現在地で製作している。

◎ 業績の概要

大阪唐木指物は、約 300 年におよぶ伝統技法をもち、中国広東地方から伝わったとされている。

唐木指物は、紫檀、黒檀、花梨、鉄刀木などを材料に釘類を使わず各種の組み継ぎ手と膠で組みたてられ美術的に価値の高い調度品であるが新田氏は主に紫檀を材料とした花台を子供 4 人と協力して製作している。

出荷先は、大阪、北陸方面で、氏の作品は、伝統をまもりながら日本的な創作を加え優雅さと気品が高いので評判が良い。

昭和 52 年には伝統工芸品として通産大臣の指定をうけ昭和 53 年度伝統工芸士の認定をうけられている。

昭和 53 年第 1 回大阪唐木指物展に出品し、優秀賞を受賞された。

また、後継者として息子 4 人を指導され、数少ないこの伝統工芸の伝承に力強い希望となっている。



職 種：唐木指物師

住 所：和歌山県有田市

生 年：明治 44 年

昭和 53 年度 和歌山県名匠

ひ の じょう 日 野 常

◎ 職歴

13才で大阪市西区北堀江 ^{きんやす}近安表具店に弟子入り。築山利喜松氏に師事したが大正2年独立、那智勝浦町で開業。

◎ 業績の概要

表具は大別して「襖」と「表装」とがある。襖は、現在息子にまかせ表装を手がけられている。

これまでの代表的な仕事としては、昭和30年那智大社社務所、大和天理教の本殿、地元の寺社などの襖を修復したほか、軸物では野呂介石、谷文晁、頼山陽、富岡鉄斎、池田桂仙、姫島竹外、田能村直入、渡瀬凌雲ほかの表装をてがけられている。

現在長男があとを継いでいるのでミニ般若心経の書写、表装を趣味とし2万号を突破、これが主な日課となっている。



職 種：^{ひょうぐし}表具師

住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

生 年：明治 26 年

昭和54年度 和歌山県名匠

さい か あきら
雑 賀 彰

◎ 職歴

先代は木材商であったが、らんまに魅せられ、昭和2年頃から独学で図案及び彫りの技術を修得し、独特のらんまを製作し続けている。

◎ 業績の概要

らんまの製作にあたっては、図案の作成は彫りの技術とともに、大変重要な要素であるが、若い頃から絵を描くのが得意であった氏は、これを生かせるらんま製作に情熱を傾けるようになり、独学で全国をくまなく歩き、関西流と関東流の相違、図案、彫り等の研究を行い、氏独自のらんまの世界を築きあげた。

自ら写生した図案を用い、力作には「波に雁」「和歌山城」などがある。

このように、氏は常に時代に即応した感覚で図案の作成を行うほか、生活様式に見合うものとして縦型のらんまや衝立などの製作にも積極的に取り組んでいる。

1957年にはアメリカのトレードウエア展に出品、特別賞を受賞している。



職 種：らんま^{せいさく}製作
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：明治41年

昭和54年度 和歌山県名匠

た なべ まさ よし
田 邊 正 義

◎ 職歴

16才で海南市の漆器工場に就職して以来50余年、漆塗一筋に歩んできた。

現在この技術を有する人は海南市でもごく稀であり、その指導にあっている。

◎ 業績の概要

漆器の下地、塗、仕上を習得した後、昭和13年漆器製造業を開業。この間、彫漆に特に優れた技能を発揮し、昭和24年第5回日展入選をはじめ、近畿連合工芸展二等賞、海南漆芸文化協会展市長賞、海南市美術漆器展市長賞受賞等、漆芸の振興のみならず、昭和30年には県漆器商工業協同組合理事、紀州漆工会副会長を歴任するなど、業界の発展にも努力してきた。

昭和43年からは、県漆器試験場に勤務し、伝統漆器の塗りは勿論、新しい化学塗料の利用法などの研究にも取り組んでいる。また、根来塗の再現研究を続け、その秘法を解明したことは高く評価されている。

昭和48年からは非常勤技術嘱託となったが以前同様常勤し、研究と後継者の育成に努めている。



職 種：漆塗師うるしぬりし

住 所：和歌山県海南市

生 年：明治44年

昭和54年度 和歌山県名匠

たに がみ い さぶろう

谷 上 伊三郎

◎ 職歴

大正2年養蚕学校を卒業後、初代善之助(祖父)から檜皮葺、柿葺の技術を習得。以来この道65年、実業に専念している。

◎ 業績の概要

大正6年、兵役を終えてのち、重要文化財青岸渡寺本堂の柿葺に従事して以来、現在まで170余棟に及ぶ国宝、重要文化財等の屋根修理にあたっている。

京都御所紫宸殿、桂離宮新書院、銀閣寺東求堂、薬師寺金堂をはじめ本県では、根来寺大塔、東照宮本殿・拝殿、丹生都比売神社楼門・本殿の他、最近では広八幡神社に秀れた手腕を発揮している。

また、後継者の育成にも熱心で、昭和30年に発足した全国寺社屋根工事業組合の役員として技術向上に努力し、昭和49年度から同組合が補助事業として行っている後継者養成の教務主任として活躍を続けている。

昭和35年文化財保護功労表彰、43年勲六等瑞宝章を受けているほか、53年には文化財保護法による選定保存技術保持者として認定されている。

現在、「檜皮葺の技術」(仮題)を執筆中である。



職 種：檜皮葺・柿葺師
住 所：和歌山県橋本市
生 年：明治30年

昭和 55 年度 和歌山県名匠

おか だ とら じろう

岡 田 虎次郎

◎ 職歴

13歳の頃から、父の手ほどきを受け、木地作りの技術を習得。昭和7年に独立し、この道一筋に黒江漆器の良質な木地作りに励んでいる。

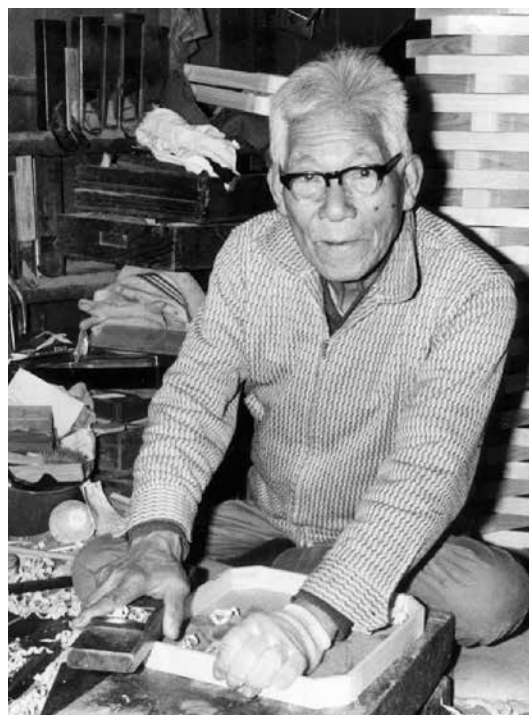
◎ 業績の概要

漆器の木地は、塗りや加飾の基礎となるものであり、木地の品質により製品の良否が左右されるため、木地作りは目立たないが極めて重要な仕事である。

木地の種類には、板もの、曲げもの、挽きものの三種があるが、氏は免状盆、文庫、三方、茶箱、銘々皿、祝膳その他あらゆる板ものを製作する。

木品製作までには、素材の選択、乾燥、木取り、はぎ合せ、削り、再乾燥の工程を経るが、年月を経てもくるいの出ない製品作りに多くの実績を残し、業界の信頼を得ている。

最盛期には海南市で約120軒あった木地作りも、現在では20軒程になっている中であって、昭和54年2月、伝統的工芸品産業振興協会から、伝統工芸士の認定を受けている。



職 種：漆器木地師

住 所：和歌山県海南市

生 年：明治34年

昭和 55 年度 和歌山県名匠

みつ い のり ふみ
三 井 智 文

◎ 職歴

長野県諏訪郡富士見町に生まれる。

18 歳の時、諏訪市内の神社新築に従事したのが契機となり、以後全国各地の国宝、重要文化財等の修復にあたっている。

◎ 業績の概要

復員後の昭和 24 年以降、長野県諏訪神社拝殿、香川県本山寺本堂、屋島寺本堂、金刀比羅宮表書院・奥書院、広島県西国寺本堂など国宝、重要文化財等の修復工事に、大工又は大工棟梁として従事したが、昭和 44 年からは（社）和歌山県文化財研究会技術員として、県内の文化財保存修理に精励してきた。

主なものとしては、薬王寺観音堂（重文）、長保寺本堂（国宝）、三船神社本殿（重文）、丹生官省符神社本殿（重文）等の修理の他、紀伊風土記の丘の民家移転（旧谷山家、旧柳川家、旧谷村家、旧小早川家住宅）にも大工棟梁として熟練した腕を発揮し、昭和 49 年度県教育功労者表彰受賞。

現在、広八幡神社楼門（重文）を修復中である。

（重文…国指定重要文化財）



職 種：宮大工

住 所：和歌山県那賀郡岩出町（現：岩出市）

生 年：大正 4 年

昭和 55 年度 和歌山県名匠

やぶ た ぜん いち
藪 田 善 一

◎ 職歴

先代は花火の販売に携わっていたが、氏は独学で製造技術を習得し、製造から打上げまで一貫した技術を有する貴重な花火師である。

◎ 業績の概要

花火の要素は、色・光・音であるが、色では紫と黄、光はより明るく、音はより遠くまで響くことを追求するという。

花火は、すべて手作りで、20 工程以上を要するが、製作者は独自の花火作りに苦心する。

花火の種類には、大別して打上花火の割物、曲物、音物及び仕掛花火の組物があるが、色と光は薬品の調合具合、音は圧力に関係のある玉張りにあるという。

多くの工程を経た苦心の作品が、ねらいどおり開花することが花火師の喜びであり、最近では、他府県の花火師とも協力して、その腕を競い合い、花火の質的向上に努めている。

昭和 46 年の黒潮国体及び昭和 52 年の第 28 回全国植樹祭の昼花火は、氏の創作したものである。



職 種：花火師
住 所：和歌山県有田郡吉備町（現：有田川町）
生 年：明治 44 年

昭和 56 年度 和歌山県名匠

いし い よし お 石 井 義 夫 (竿銘 げてさく)

◎ 職歴

昭和 6 年、実兄故児島光雄（竿銘 師光）氏に師事。竹製へら鮎釣り竿（通称 へら竿）作りの技術を習得。

昭和 10 年、独立し、銘を「げてさく」と称する。

◎ 業績の概要

へら竿は真竹、高野竹及び矢野竹、それぞれの竹の特質を生かし、作られるが、その大切な部分である穂先から 2 番目の竹（学名・スズ竹。高野竹と呼ぶ。）が高野山頂近辺で良質のものが採取できることから、橋本市及び高野口町で、産業として発展した。

氏は、昭和 10 年創業以来、製作技術の向上、研鑽に努める一方、後進技能者の指導にも積極的に尽力され、現在まで弟子 10 人、孫弟子 19 人を育成された。

また、昭和 35 年には、紀州製竿組合を結成、初代組合長として 5 年間（2 期半）にわたり、組合の基礎作りから、材料の共同購入等、業界の近代化に努めるとともに、試し釣り用のつり池を開設（昭和 39 年）するなど、製作技術向上のためにも多大の功績を残された。

その後、昭和 46 年～ 48 年には再度組合長に推され、化学製品のグラス竿やカーボン竿の出現によって不況に陥った竹竿業界の振興に尽力され、昭和 50 年からは同組合顧問となり現在に至っている。



職 種：製竿師^{せいかんし}

住 所：和歌山県伊都郡高野口町（現：橋本市）

生 年：大正 3 年

主な表彰歴等

- 昭和 39 年 県政功労表彰（産業振興）受賞。
- 昭和 39 年 迎賓館への作品出品に伴う感謝状（県知事）を受ける。
- 昭和 56 年 県技能賞受賞。

昭和 56 年度 和歌山県名匠

ふな だ たけ ひこ

鮒 田 武 彦 (通称

ふなだ わ どう

鮒 田 和 道)

◎ 職歴

昭和 4 年、父・鮒田初太郎氏から手ほどきを受け、指物技術を習得。

戦後間もなく独立し、この道一筋に励んでこられた。

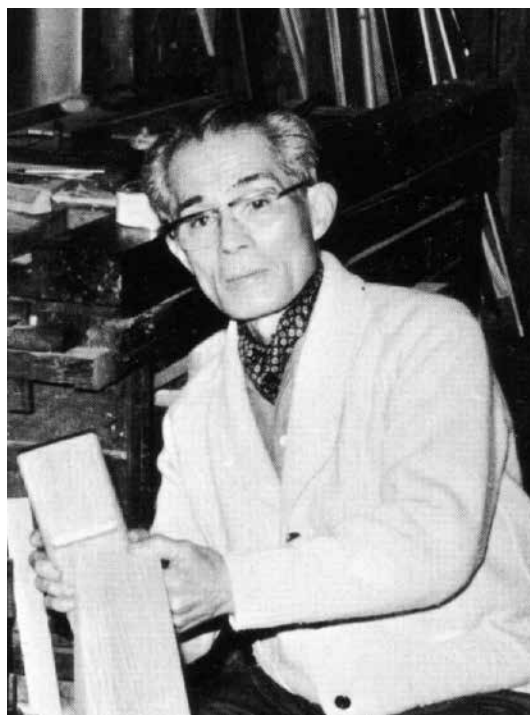
◎ 業績の概要

指物製作には、素材の選択、乾燥、木取り、加工及び仕上げの工程を経るが、いずれも素材の性質を十分見極めめることが重要であり、氏は、これらを一貫して製作される。

父・初太郎氏は厳格で、他の弟子と別け隔てすることなく、氏の入門後 5 年間は、板けずりのみの修業であった。

氏は、茶だんす、箱類など、あらゆる家具類を製作されるが、記念すべき作品としては、昭和 35 年、佐藤春夫氏の文化勲章受章記念として、注文を受けた文机、また、昭和 37 年 5 月、両陛下下行幸啓の際、速玉大社社殿にお座りになられた御椅子と御帽子置きなどである。

また、昭和 52 年、第 28 回全国植樹祭の折、新宮市から陛下に献上された、植物標本入れの桐箱も氏の作である。



職 種：指物師さしものし

住 所：和歌山県新宮市

生 年：大正 2 年

昭和 57 年度 和歌山県名匠

あら かわ たけ お
荒 川 武 夫

◎ 職歴

14才で上京し、伯父の経営する建具店で組子建具の技術を習得。

書院らんまや書院障子を中心にこの道一筋に励んでこられた。

◎ 業績の概要

細い木を複雑に組み合わせて作りあげる組子建具は、高度な技術と手間のかかる仕事である。

素材は、木曾ヒノキや吉野杉を用い、仕上げまでに7種類以上のかんなを使いわけ

る。作品は、伝統の「亀甲」、「三重亀甲」、「桜亀甲」、「菊」等をはじめ、特に高度な技術と熟練を要する「干し網」や「投げ網」の図柄を配した気品の高いものであり、業界誌「月刊建具工芸」にも数多く紹介されている。

昭和46年黒潮国体の際、両陛下のお泊所（和歌浦）の「長らんま」は氏の作品であり、和歌浦東照宮・石の間の^{さんからと}棧唐戸のらんま修復にも技を発揮された。

また、最近では「組子」と「彫り」を合わせた衝立や屏風など、時代の好みに合った製品づくりにも意欲を燃やしている。



職 種：^{しよんたてぐし}書院建具師
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：明治45年

昭和 57 年度 和歌山県名匠

しん ぼり たけ お
新 堀 武 夫

◎ 職歴

13 才の頃から和紙、殊に古沢紙に興味をもち、研究を続ける。

20 才の頃から大阪に居を移し、表装技術を習得。

昭和 37 年、現在地に表具店を開業。

◎ 業績の概要

表装には糊炊き、柄合わせ、裏打ち、組立等多くの工程がある。

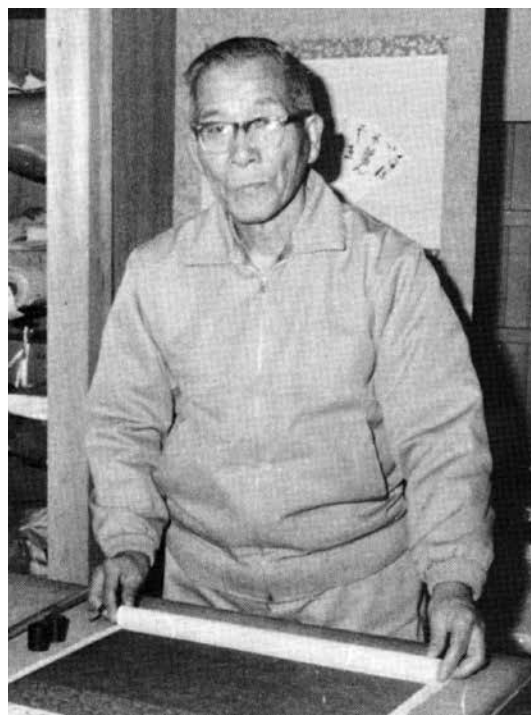
「そり」、「うき」、「折れ」などの出ない表装をするためには、紙や裂地の性質を十分見極めなければならず、それぞれに合った糊を作ることが最も大切である。

また、「本紙」に似合う表装に仕上げるための「柄合わせ」も、表具師としての感覚を問われる重要なものである。

氏は、これらの技術の向上のため、今なお研究活動を続け、後進の指導にも尽くされている。

昭和 50 年からは、高野山霊宝館の古書画の修復にあたり、見事な出来栄えをみせている。

昭和 42 年から県表具組合副理事長、また、同 53 年から同組合紀北支部長を務めておられる。



職 種：表具師^{ひょうぐし}

住 所：和歌山県伊都郡かつらぎ町

生 年：明治 45 年

昭和 57 年度 和歌山県名匠

やま ぐち てい じろう

こうほう

山 口 貞次郎 (号 光峯)

◎ 職歴

家業は製材業であったが、那智黒への興味と、持ち前の手先の器用さにより、24～25才の頃から那智黒硯の製作を始め、昭和12年からは現在地において、製作を続けておられる。

◎ 業績の概要

原石の自然な姿を生かした那智黒硯は、緻密な石質と適度な硬度により愛硯家あいけんかに珍重されている。

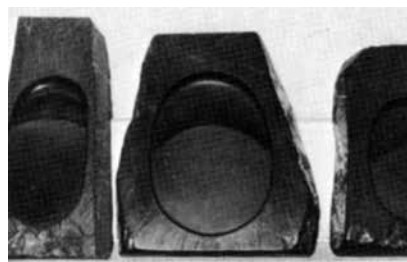
硯の製作には、石採りから、形づくり、裏ならし、荒彫り、彫り、磨きまでいくつもの工程があり、多くの種類の、のみや砥石を使い分ける。

墨とのなじみをよくするため、特に「なぐら」と呼ばれる仕上げ砥石による磨きには神経を使い、製品によっては丸二日かけることもあるという。

氏は、これらの技術を後継者に指導されるとともに、今なお、のみをもち、なぐらをかけ続けておられる。

なお、製品は県優良みやげ品に推せんされている。

また、昭和52年の第28回全国植樹祭の折、行幸啓特産展に出品し、御買上げされている。



職 種：那智黒硯製作なちくろすずりせいさく
住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町
生 年：明治31年

昭和 58 年度 和歌山県名匠

あ だち さだ くす
安 達 貞 楠 (刀銘)

りゅうじんたろうみなもとさだゆき
龍神太郎源貞行)

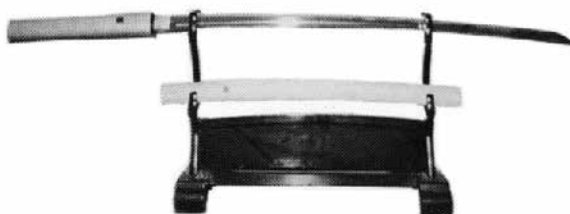
◎ 業績及び経歴

15才の時に刃物鍛冶職に弟子入りし、10年間修業、その間刀剣に関心を持ち勉強を続け、昭和18年(現)御坊市の大阪造兵廠指定工場紀南日本刀鍛錬研磨道場鍛錬主任を務め、同所で人間国宝月山昇一門の川野充多良氏に師事、終戦まで軍刀の製作に専念した。

戦後刀剣製作を禁止された時期もあったが、地道に古来より伝わる技法、相州伝、大和伝を研究する。

昭和41年文化庁登録刀匠となり、昭和42年には財団法人日本美術刀剣保存協会主催の「新作名刀展」に出品、昭和55年まで連続出品し10回入選している。

「鍛え」・「焼き入れ」次第で金・銀以上の美しさがでる黒鉄の魅力にひかれると語る名匠である。



職 種：刀匠^{とうしょう}

住 所：和歌山県日高郡龍神村(現：田辺市)

生 年：明治42年

昭和 58 年度 和歌山県名匠

い と う し ょ う ぞ う
伊 東 昌 造

◎ 業績及び経歴

徳川時代より四代続く海南市黒江の漆器製造家に生まれ少年期より父の手ほどきを受ける。大正6年町立黒江漆器学校で漆器の基礎を学び、その後家業の漆器製造業を継ぎ戦後は漆下地一筋に歩む。

「漆下地は塗りや加飾の基礎となるもので、下地の良し悪しで製品の良否が決まる。」と氏は語る。目立たないが伝統漆器になくてはならない重要な工程である。

氏の漆下地は地元業界でも高く評価され、伝統的工芸品産業振興協会から昭和57年、伝統工芸士と認定された。

次第に後継者が少なくなる伝統産業を憂い、後継者育成に特に尽力し、昭和55年よりはじまった伝統漆器技術研修会の漆下地部門の講師を本年まで連続して務めるなど紀州伝統漆器業界発展のために大きく貢献している。



職 種：うるししたじし漆下地師

住 所：和歌山県海南市

生 年：明治35年

昭和 58 年度 和歌山県名匠

はま の えい じ ろ う

濱 野 榮二郎 (号 等等人)

◎ 業績及び経歴

日高郡南部町（現：みなべ町）出身。小学生の頃、教科書の一節「研ぎ出し蒔絵は日本の誉れ。」に感動し、12才の時、海南市黒江の蒔絵師石坪安治郎氏に師事し、7年間の修業の後独立したが、模写では新しい道が開かれなと考え、さらに技術・技法の修得を志し大正14年、京都の著名な蒔絵作家中大路季嗣氏に師事して、さらに研鑽を積んだ。

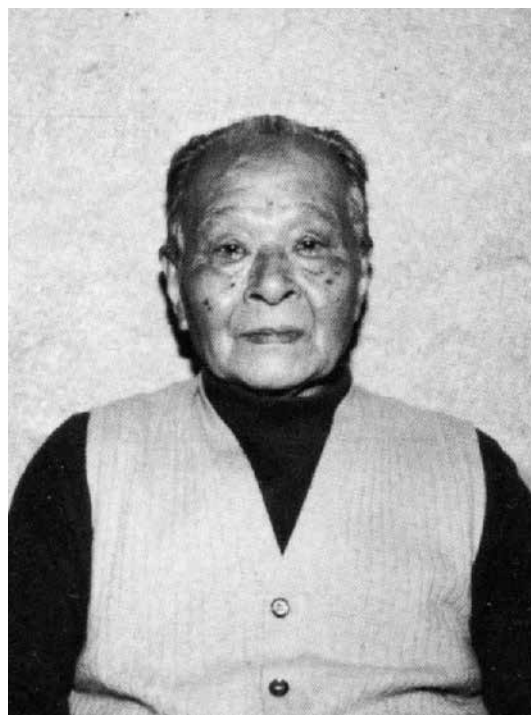
昭和4年（現）海南市に帰り、蒔絵師として製作活動に精進するとともに、この間和歌山の美術会「黒鳥会」結成に参加し、美術界諸氏との交流を深め、その知識を漆芸にとり入れ数々の優秀な作品を製作した。

戦時下には紀州漆器蒔絵沈刻工業組合の専務を務めるなど業界育成に尽力した。

戦後は、海南漆器の名声を高めるため専ら優秀な製品づくりに没頭し、さらに昭和52年紀州伝統漆器振興会の設立に尽力するなど漆器産業発展のために大きく貢献されている。

近年は、下地、塗り、蒔絵の工程を自ら行ない、漆茶碗の創作に取り組むなど本県蒔絵師の第一人者として、絶えず業界に新風を送っている。

昭和57年度、伝統的工芸品産業振興協会から伝統工芸士と認定された。



職 種：蒔絵師
住 所：和歌山県海南市
生 年：明治34年

昭和 59 年度 和歌山県名匠

なか ぼう きみ こ
中 坊 君 子

◎ 職歴

幼少の頃、当時下古沢の農家で副業として盛んに行なわれていた高野紙の紙漉きを手伝っていたが、本格的には12才頃から始め、以来60余年間今もなお営々と高野紙の製作に従事している。

◎ 業績の概要

高野紙はその地名をとって古沢紙ともよばれ、素朴でねばり強い紙質で、主として傘紙や障子紙又上質のものは古くから高野山の経文の書写用などに用いられてきた。

昭和の初期には90軒にもおよぶ紙漉き農家があったが、現在では高野紙伝統の技術は中坊家母娘ただ一軒に受けつがれているのみとなり、一冬に数千枚を生産している。

高野紙製作には各種の工程があるが、中でも、漉き桶の中の原液を木杵で漉く際、均質に厚さを整え、上質の紙を製作するには、経験に裏うちされた微妙な技術が必要である。



職 種：こうやがみせいさく高野紙製作
住 所：和歌山県伊都郡九度山町
生 年：明治40年

昭和 59 年度 和歌山県名匠

み さき たかし
御 前 隆

◎ 職歴

15才の頃より和歌山の檀上楽器店及び大阪で和楽器の製作技術を学ぶ。

昭和7年に独立し、以来50余年間一貫して和楽器の製作、販売並びに後継者の育成につとめる。

◎ 業績の概要

60才頃までは各種の和楽器の製作を手がけていたが、その後三味線製作の各種の工程のうち、最終工程である皮張りから組立て、調律に取り組んでいる。

皮張りには、皮の選定から張り糸まで10種に余る工程があるが、良い音を出すための最も重要な工程として、皮を胴に引張りながら固定する作業があり、力加減が微妙なこれらの技術は、長い経験を通じて体得する他はないものである。

氏は良い音を極限まで探究し、自分が納得する作品の製作販売に徹しており、数少ない伝統技術の保存につとめている。



職 種：三味線製作^{しみせんせいさく}
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：明治41年

昭和 60 年度 和歌山県名匠

いわもと まさ ゆき

岩本正幸

◎ 業績及び経歴

祖父の代より川船づくりを家業としており、こどもの頃から造船所の手伝いをしてきたが、本格的には 23 才からプロペラ船の発明者として知られる父に習い、以来 40 年川船の研究と製作に取り組んできた。

かつて新宮川筋の交通の手段は船であり需要も多く、氏の造船所だけでも年間 30 艘もの製造をしていた時期もあったが、昭和 35 年頃から新宮川筋の道路の整備等により貨客輸送も陸送に転じ、川船の需要が少なくなり、瀨峡観光用プロペラ船を残すだけとなった。

昭和 39 年、それまで新宮川水運に利用されてきたプロペラ船のスピードアップと騒音の解消に取り組み研究を重ねた結果、ウォータージェット船を開発し、瀨峡観光に大きな功績を挙げた。

川船製作にあたっての課題は浅瀬を遡流する時の船の安定性とスピードアップといわれ、船底の幅、両外板の角度ならびに荷の重量の関係によって決まるといえるが、この 3 つのバランスが非常に難しく、今なお研究を続けている。

昭和 58 年、長年の造船の経験を生かして、新宮熊野速玉大社の例大祭「御船まつり」に使用されてきた重要文化財「神幸船」が老朽化したため、300 年ぶりに代船を完成させた。

また最近では、かつて熊野（新宮）川の風物詩であった三反帆をモデルにして、観光用川船の製作に励んでいる。



職 種：川船設計製作
住 所：和歌山県新宮市
生 年：大正 12 年

昭和 60 年度 和歌山県名匠

おお かわ ひらく
大 川 啓

◎ 業績及び経歴

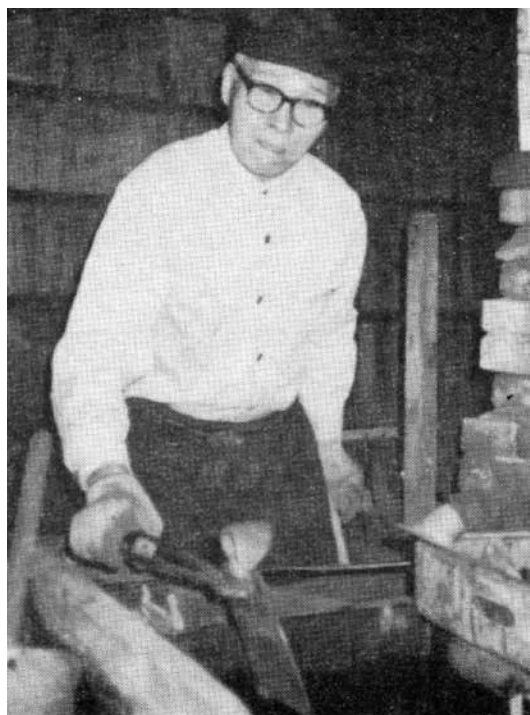
16才の時、新宮市の大川鍛冶に弟子入りし、10年間の修業を積んだ後、見込まれて鍛冶場を継ぎ、刃物鍛冶として一筋にこの道を究め今日に至る。

新宮は古くから鍛冶が栄えたところで、農具、漁具、また武器等も製造していたが、明治以降は伐採用のよき、なた等の刃物や筏のかんが主に作られるようになった。

昭和7年には新宮市内に30軒もあったといわれる鍛冶屋が、昭和35年から筏流しもなくなり、また山仕事の減少等により次第に少なくなっていった。

このような情勢のなかで、一時期には10名を超える職人を抱えたこともある大川鍛冶も縮小したが、氏の作る造林がま、枝打ちよき等は優れた製品で、県内はもとより東京周辺をはじめ各地からの注文も絶えることなく、跡継ぎの長男 治氏とともに昔ながらの技法で鍛冶職を続けている。

製品の完成までにはさまざまな工程があるが、なかでもはがねの選別、そして焼き上げが最も重要であるといわれ、長い経験を通して体得した氏の技術は高い評価を受けている。



職 種：鍛冶職かじしよく

住 所：和歌山県新宮市

生 年：明治43年

昭和 61 年度 和歌山県名匠

ほり

しょうじろう

堀

庄次郎

◎ 業績及び経歴

大正 14 年小学校卒業後すぐ、土井定太郎氏（昭和 52 年度県名匠）に弟子入りして以来、今日まで 60 年余りにわたって檜皮葺師として屋根葺替えを行ってきた。

氏が手がけた社寺には、奈良県の談山神社権殿（重文）・十三重塔（重文）、春日大社本殿（国宝）・若宮神社（重文）、京都府の東本願寺勅使門をはじめ本県では三船神社三殿（重文、桃山町（現：紀の川市））、丹生都比売神社三殿（重文、かつらぎ町）、東照宮（重文、和歌山市）などがあり、数多くの建造物の保存修理に携わってきた。

なお檜皮葺とともに柿葺や土居葺にも取り組み、現在、国の重要文化財指定建造物である那智山青岸渡寺本堂の柿葺の修復を行っている。

また経験と錬磨に裏付けられた技術と深い知識を生かし、後進の指導育成にも努められるなど、その功績は極めて大きい。

（重文…国指定重要文化財）



職 種：ひわだぶきし 檜皮葺師

住 所：和歌山県橋本市

生 年：大正元年

昭和 62 年度 和歌山県名匠

おお たに ぜん べ え

大 谷 善兵衛

◎ 業績及び経歴

大阪市に生まれ、大谷家に代々伝わる蠟ろう型がた鑄造技法について、幼少の頃から父親の指導を受ける。昭和 23 年から現在地に居を移し、これまで 50 年余りにわたって鑄金に取り組んできた。

蠟型鑄造技法とは、蜜蠟に松ヤニとパラフィンを混ぜたもので作品の原型を作り、これを真土まねと呼ばれる粘土で包み、火の中で焼いて蠟を流し出す。この鑄型に溶かした銅と錫の合金を流し込んで、原型と同じ形の作品を造り出すという技法である。

すなわち、一原型一作品というのが蠟型鑄造技法の特徴であり、複雑な形態を鑄造するのに適している。

作品の完成までには永年の経験を必要とするが、なかでも鑄型に溶解した金属を流し込む際は、作品の出来不出来が決定されるため、全神経を集中するという。

作品は花器、水盤、香炉などの小品から、銅像、仏像などの大きなものまで製作している。



職 種：鑄匠ちゅうしょう

住 所：和歌山県橋本市

生 年：大正 10 年

昭和 62 年度 和歌山県名匠

つ も と は る の 津 本 晴 の

◎ 業績及び経歴

幼少の頃から、当時冬の農閑期に各家ごとに行っていた、保田紙の紙漉きを手伝い始め、17、8歳のころには一人前に漉けるようになった。以来、通算して40年余りにわたって従事してきた。

保田紙は、江戸時代初期に奈良吉野地方から、当時山保田ノ庄と呼ばれたこの地方に紙漉きの技術が伝わったと言われており、傘紙や燻蒸幕用の紙などに用いられ、特に海南の和傘用として出荷された。

しかし、昭和28年の大水害によって、紙漉きの道具が流されてしまい、さらに和傘の需要が減少したことなどにより、和紙作りは途絶えた。

その後、昭和54年2月、清水町高齢者生産活動センター（現：有田川町高齢者生産活動センター）の開設により、再び伝統の技法が復活し、全盛期に紙漉きの技術を体得した津本さんをはじめ三人で、保田紙の手漉きを行なっている。

保田紙の製法には、原料となる楮こうぞの切りそろえに始まって、各種の工程があるが、中でも簀子すのこで紙を漉く際に、一定の厚さに漉き上げるためには、微妙な技術が必要となる。

現在、同センターで製作された和紙は、便せん、封筒、はがき、名刺、その他民芸品などに使用されている。



職 種：保田紙手漉やすだがみてすき

住 所：和歌山県有田郡清水町（現：有田川町）

生 年：明治40年

昭和 63 年度 和歌山県名匠

お ぜき い さ み
小 関 伊佐美

◎ 業績及び経歴

幼少の頃より、父親の小関豊橋氏より沈金の技能を習得し、通算して50年余りにわたって沈金に取り組んできた。沈金の伝統的技能の研鑽に努め、高度の技能を身につけ、永年にわたり漆器産業振興のため多大な貢献をされるとともに、漆器の加飾技術の研究と改善向上に対して大きな功績を残してきた。

沈金については、県下の漆器業界の中で一番優れた技能を修得しているといわれている。紀州漆器伝統産業会館には、代表作である額皿の鶴や色紙箱の鶴などが飾られている。雅号は豊景。現在は、硯箱、花瓶、文庫、テレホンカードなどを中心に製作している。

昭和54年には伝統的工芸品産業振興会より伝統工芸士に認定されている。また、昭和54年より紀州伝統漆器振興会会長に就任され、現在に至っている。

沈金の技法は、漆の塗面に模様を型どりして、模様のおり沈金ノミで荒彫りし、上絵ノミで上絵をする。その後、漆を少し塗り溝の中に漆を残してふき取り、金箔をはり、押さえたり叩いたりして溝の中に入るようにし、表面をふき取る。さらに、金箔だけでなく、金粉、銀粉や顔料を使い、色彩に妙をつける。



職 種：沈金師ちんきんし

住 所：和歌山県海南市

生 年：大正12年

昭和 63 年度 和歌山県名匠

やま もと ぐん じ
山 本 軍 治

◎ 業績及び経歴

中辺路町（現：田辺市）に生まれ、京都市の庄司大雅堂で、約7年間表具の技術を習う。その後、田辺市の橋本竹泉堂に職人として入り、技能の研鑽に努め、卓越した技能を身につけ、昭和26年に独立して、いわゆる”反り”をなくした折畳式色紙掛軸の考案によって業界に貢献するとともに、昭和43年から昭和56年まで県表具組合副理事長、同紀南支部長として後進技能者の指導に尽くし、現在に至る。掛軸表装に関しては、本紙と裂地きれじの配色、使い方、寸法の割り出し、糊かの使い方、和紙の選び方、下軸の付け具合等に優れた技能を身につけられている。

特に古文書修復については、業界における第一人者といわれている。

軸物を専門とし、代表的なものに、湯浅町の深専寺の「釈迦涅槃」、粉河寺の寺宝「切支丹通行手形控帳」の修復があり、特に切支丹の通行手形控帳は、虫喰がひどく永年月の虫の分泌物により1枚の板の如く固まり、縫針、竹べら、ピンセットのみで困難な修復作業を行なった。また昭和54年より県立図書館の委託を受けて、本居宣長その他の古文書の修復も行った。

また、昭和54年に和歌山県技能賞、昭和61年には卓越した技能者の労働大臣表彰（現代の名工）を受賞されている。



職 種：表具師ひょうぐし

住 所：和歌山県田辺市

生 年：大正10年

平成元年度 和歌山県名匠

やま うえ ふみ お やまびこ
山 上 文 雄 (竿銘 山彦)

◎ 業績及び経歴

昭和12年橋本尋常高等小学校を卒業後、橋本地方にヘラ竿づくりを伝えた源竿師(山田岩義氏・昭和49年度和歌山県名匠)に弟子入りした。

昭和15年に独立自営。以来「山彦」の竿名で、独創的な技法により機能性と芸術性に富んだ数々の名品を生み出した。

握りの部分に真竹の表面を極細に割って張りつける「竹張り握り」の技術や絹糸と漆を使った独自の加飾法により「山彦塗り」の名で親しまれている「透かし塗り」等がそれである。又、独特な「火入れ」技法を用い、山彦の竿は狂いが生じないといわれている。

昭和37年には天皇陛下にヘラ竿を献上している。

昭和25年から31年まで紀州製竿組合長を務めた。

昭和51年には和歌山県技能賞を、昭和63年には卓越した技能者(現代の名工)の労働大臣表彰をそれぞれ受賞している。



職 種：製竿師

住 所：和歌山県橋本市

生 年：大正10年

平成2年度 和歌山県名匠

うえ なか き よ し

上 中 喜代司

◎ 業績及び経歴

14歳で和歌山市の谷口木工に箆筒造りの見習いに入り、修業をつんだ後、昭和29年、20歳という異例の若さで独立した。

以来、江戸時代後期に始まったとされる紀州桐箆筒の伝統技法を継承、発展させてきた。

一般的に桐箆筒は、防虫性、防湿性、防火性に優れているといわれているが、特に氏の作品は、繊細な仕口と仕上げに特徴があり、優れたデザイン感覚に裏付けされて、高い品格を有している。

昭和62年度全国優良家具展大阪大会に出品した総桐箆筒が通産大臣賞に輝くなど、多数の賞を受賞している。

昭和62年に、和歌山市の紀州箆筒が国から伝統的工芸品産業の指定（「伝統的工芸品産業振興法」に基づく。）を受けたが、これは産地指定に傾けた氏の情熱のたまものといえる。

現在は、産地の後継者育成にも力をそそいでいる。

昭和60年から紀州桐箆筒協同組合理事長をつとめている。

平成元年度に伝統工芸士の称号（伝統的工芸品産業振興協会）を受けるとともに、県政功勞を受けている。



職 種：桐^{きりたんす}箆^す筒^{せいさく}製作

住 所：和歌山県和歌山市

生 年：昭和8年

平成2年度 和歌山県名匠

たけ うち ぶん きち
武 内 文 吉

◎ 業績及び経歴

昭和2年、日高郡内の尋常高等小学校を卒業後、大阪市内の商店に奉公に出たが、同10年に帰郷して、家業の鍛冶職見習いに入った。

その後、神戸製鋼所や御坊市内の鉄工所勤務を経た後、同22年に鍛冶職として独立した。

以来、刃物鍛冶として「手打ちてうち反か（カネブン）」の銘で、出刃、柳刃、刺身、菜刀等の包丁類をはじめ、かま、なた、剪定鋏等を製造している。

ふいごと木炭を使用した伝統的な手打ち製法をかたくなに守り続けている県内では貴重な鍛冶職である。

刃金は安来産の最高品を使用し、地金に刃金を取付ける工程から「焼入れ」「研ぎ」「磨き」「柄つけ」の工程までを一貫して自身で行っており、氏の製品には素朴な手作りの味がにじみ出ている。

製品は、日高・有田地方の家庭や農家で愛用されているが、徳島、広島方面へも販売されている。

向打ちは妻の敏子さんがつとめている。



職 種：鍛冶職かじしよく

住 所：和歌山県御坊市

生 年：大正3年

平成3年度 和歌山県名匠

おの うえ とく はる

尾上 徳 治

◎ 業績及び経歴

昭和20年高等小学校を卒業後、大工見習に入る。高野山の各寺院にて宮繕工事に携わり大工修業を続ける間に大阪製図専門学校で設計手法を学ぶ。

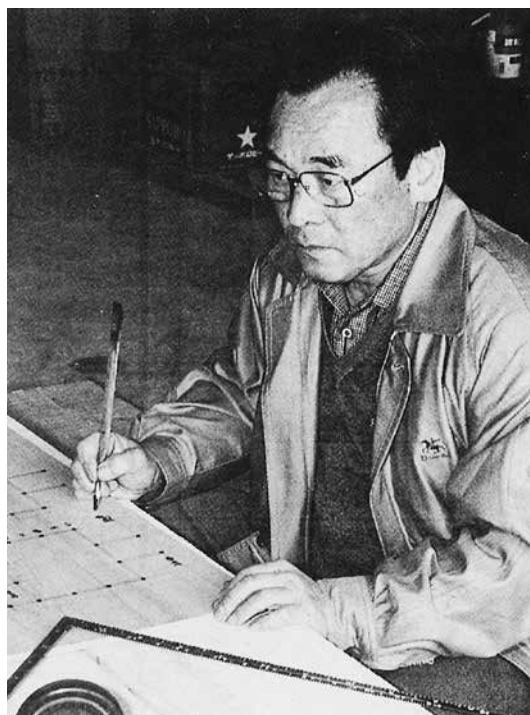
昭和32年、県名匠の宮大工、辻本喜次氏が経営する大彦組の門をたたき、7年間の再修業。

この間、火事で焼失した高野山奥之院御供所の再建工事に墨師として加わったことが、宮大工としての名声を高めることになった。

昭和39年に独立し、尾上組をおこした。昭和43年の斑鳩中宮寺本堂の五坊寂靜院への移建、昭和45年の高野山龍泉院客殿新築などが棟梁としての初期の仕事である。又、この間高野山大学元学長の中川善教前官から社寺建築の心がけや仏事の詳細について指導を受けたことが氏にとってその後の大きな財産となった。

最近の主な社寺建築は、遍照光院客殿新築(昭和57年)、成福院八角摩尼宝塔改装(昭和59年)、金剛峯寺増築(昭和63年)、恵光院本堂新築(平成3年)などで高野山の主要社寺建築の多くを手がけている名棟梁である。又、茨城県水戸市の宝蔵寺不動堂新築(昭和56年)など他府県でも数多くの仕事をしている。

一級建築大工技能士(昭和37年取得)。



職 種：宮大工みやだいく

住 所：和歌山県伊都郡高野町

生 年：昭和5年

平成3年度 和歌山県名匠

わ だ と し は る
和田年晴

◎ 業績及び経歴

昭和20年、県立和歌山商業学校を卒業後、家業の和田漆器店に入り、昭和52年、父の死後同漆器店を継ぎ、現在に至る。

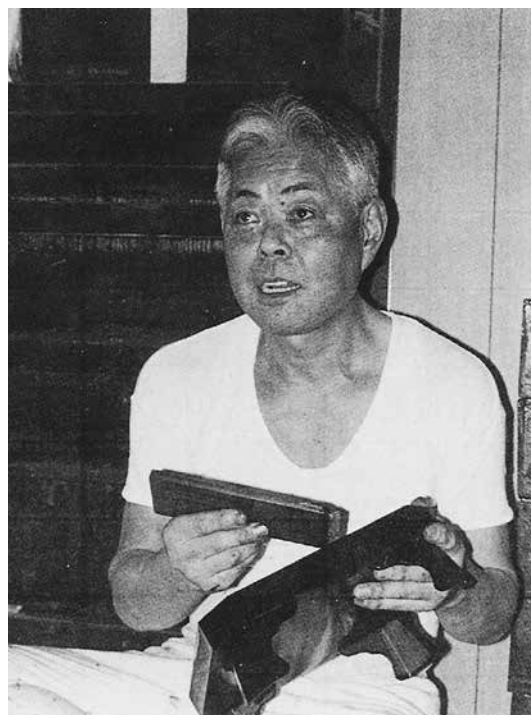
40有余年の長きにわたり、伝統的漆塗技法である花塗の技法を守り続けている。

花塗（塗立ともいう。）は黒江塗の特徴で、呂色塗ろいろぬりとは違い、工程中研磨することなく塗り放して仕上げる技法で、塗面の張り、刷毛目などがなく、しかも塵埃が付着しないよう細心の注意が要求される非常に高度な技術である。和田氏は黒江の漆塗師の頂点に立ち、その製品の完成度は他の追随を許さないと言われている。

氏の製品は、広蓋、賞状盆、切手盆等の盆類、文庫、硯箱などが主で、ほとんどが京都の間屋におろされている。

全国漆器展・伝統的工芸品産業振興協会長賞（昭和59年度）、全国漆器展・和歌山県知事賞（昭和56年度、57年度、62年度）、全国伝統的工芸品展・奨励賞（昭和56年度、57年度、平成2年度）など数多く受賞している。

昭和63年、伝統工芸士（伝統的工芸品産業振興協会）に認定されている。



職 種：うるしぬりし漆塗師
住 所：和歌山県海南市
生 年：昭和3年

平成4年度 和歌山県名匠

おか だ のぼる
岡 田 昇

◎ 業績及び経歴

昭和18年尋常高等小学校卒業後、父であり師と仰いだ故岡田虎次郎氏の指導で漆器木地師の道に入り、伝統技術を受け継いだ。

昭和57年、父の死後、“岡虎”の屋号を継承し、この道一筋に紀州漆器の木地づくりに励んでいる。

漆器は、木地、下地、塗り、加飾などの工程を経て製作される。

木地づくりが製品の良否を左右するため、木地師は、目立たないが最も基本的な仕事であり、高度な技術を必要とする。

近年、生活様式の変化に伴って木地素材も変わり、最盛期には130軒余りあった木地業者が現在では数軒を残すのみとなっている。

そうした中において氏は、伝統産業を守るという一途な心で永年研さんを重ね、素材の選択から板切り、削り、留付けなどの工程において、卓越した技術を発揮し、業界の信頼を得ている。

氏の製品は、短冊箱、重箱、祝い膳などが主で、その他美術工芸品にも多くの実績を残し、昭和63年、伝統工芸士（伝統的工芸品産業振興協会）の認定を受けている。



職 種：漆器木地師

住 所：和歌山県海南市

生 年：昭和2年

平成5年度 和歌山県名匠

たま き も いち
玉 置 茂 市

◎ 業績及び経歴

明治45年日高郡美山村（現：日高川町）で生まれ、おじである山田辰之助氏に弟子入りし、今日まで65年間、伝統技術を守るという一途な心で研鑽を重ね、この道に精進している。

氏は、桶の素材である杉及び竹の選定から、製品の完成まで一貫して一人で行っている。製作した桶には自ら励み、自ら努力されて磨かれた技術と、桶製作一筋にかけた情熱に裏付けされた手づくりのあたたかい風格がにじみ出ている。

桶の周囲の一枚一枚の板を「樽（くれ）」といい、「くれなた」で割り刃物で荒けずりをする。その後、「かた（定規）」にあわせて、正確な円を作る。この工程には、特に高度な技術を必要とし、氏が独自に考案した道具を使い、永年つちかわれた技術を駆使し製作する。そして、竹を割ってつくった輪である「たが」をはめこみ、最後に竹釘で接合しコンパスで円を描いて型をとった底板を斜にして、槌（つち）で根気よくはめる。

完成品は、高野山をはじめ多方面からの信頼を得ており、製品としては、酒樽、味噌樽、菓子桶などがある。



職 種：おけせいさく桶製作
住 所：和歌山県那賀郡粉河町（現：紀の川市）
生 年：明治45年

平成5年度 和歌山県名匠

かつ また ふみ お
勝 股 文 夫

◎ 業績及び経歴

昭和6年日高郡南部川村（現：みなべ町）で生まれ、紀州備長炭生産に昭和24年から従事し、以来、約44年間この道一筋に精励し、南部川村紀州備長炭生産者組合の初代組合長として地域の指導的役割を果たしている。

紀州備長炭の炭窯構築法・製炭技術・炭質は、県内だけではなく、全国的に有名で、作業工程のなかで炭窯に空気を送りこみ、窯の内部の温度を1000度以上にする「精錬」の巧拙が、炭の良し悪しを決める。しかし、窯の内部の状況が見えなく経験と勘だけの作業であるため、熟練した技術が必要になる。

氏は、和歌山県無形文化財の指定を受けている「紀州備長炭技術保存会」から推薦され、紀州備長炭指導製炭士の認定を平成4年に受け、その卓越した技術が高く評価されている。

又、体験学習の指導や後継者育成に情熱を傾けるなど業界のリーダーとして活躍されており、平成2年に「和歌山県農民賞（県知事）」と「林野庁長官感謝状」、平成4年に「特用林産功労者表彰（県知事）」等を受賞している。



職 種：きしゅうびんちょうたんせいさく紀州備長炭製作
住 所：和歌山県日高郡南部川村（現：みなべ町）
生 年：昭和6年

平成6年度 和歌山県名匠

かり や ひで たか
狩 谷 英 孝

◎ 業績及び経歴

昭和8年日高郡美浜町で生まれる。中学校を卒業するとすぐに師である父狩谷市松氏の船造りの世界に入り、今日まで46年余り、この道一筋に精進している。

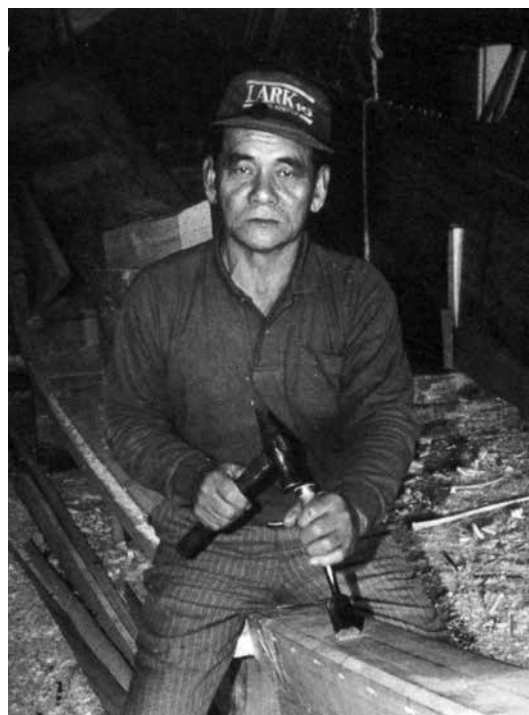
近年、FRP（強化プラスチック）船が普及しているなか、地曳き網漁法に関しては、今なお木造船が主流を占めている。

氏は、木造船の材質である檜及び杉の選定から、船の完成までの全製作工程を一人で行っている。

船の製作は、発注者から船のデザインだけの依頼を受け、長年の経験と勘で、図面や機械も用いず手作業で行っており、時には、丸一日製作に没頭するなど、船造りに対する情熱がうかがえる。

製作過程で最も神経を使うところは、「みおし（船首台）」で、この部分が船の中心であり、船のバランスをとる箇所である。また、船体の加敷部分^{かじき}を、火も使わないで流線に曲げていき、寸分の狂いもなく張り合わせていく作業は、熟練した技術が必要である。

氏の製作した船の数は、現在までに約60隻で、美浜町から印南町あたりの沿岸には、雄大な船体を横たえている木造船が、多数見受けられる。



職 種：船大工^{ふなだいこく}
住 所：和歌山県日高郡美浜町
生 年：昭和8年

平成6年度 和歌山県名匠

はし もと けい いち
橋 本 恵 一

◎ 業績及び経歴

昭和7年に田辺市で生まれる。京都市の藤岡光影堂で、約8年間表具の技術を習う。その後、郷里田辺に帰り、父橋本豊吉氏の後、京表具「竹泉堂」を継ぎ、今日までの46年余り、技能の研鑽に励み、卓越した技能を身につけ、数々の襖、掛軸、屏風及び古文書などの修復に努めている。

重要な文化財の絵画等の修復は、修理前調査から始まり、数十工程の作業を経て仕上がるもので、根気と熟練が必要であり、あくまでも現状維持を原則としながら、しかも長い年月に耐えるよう修復している。

氏の手で修復され息を吹き返した代表的な文化財には、奈良法華寺蔵「絹本著色阿弥陀三尊及童子像」、京都歡喜光寺蔵「絹本著色一遍上人絵伝」、京都神護寺蔵「紺紙金字一切経」をはじめとし、現在、県立博物館に所蔵されている「熊野権現縁起絵巻（江戸時代）」、「道成寺縁起（江戸時代）」、「役行者像（室町時代）」などがある。

特に国宝や重要文化財の修復については、県における第一人者といわれている。

昭和58年から平成元年まで県表具組合副理事長、同紀南支部長として、業界の発展と後進の指導に寄与し、多大な功績を残しており、平成元年度には、和歌山県技能賞を受賞している。



職 種：表具師ひょうぐし

住 所：和歌山県田辺市

生 年：昭和7年

平成7年度 和歌山県名匠

ふる た たつ お
古 田 龍 雄

◎ 業績及び経歴

明治37年日高郡中津村（現：日高川町）で生まれる。二十歳の時に、有田金屋町（現：有田川町）の大松氏の籠に巡り合い、その魅力にみせられ、籠づくりを始め、今まで、約70年間その製作に努めている。

氏の籠づくりは、大松氏のひとつの籠が師匠であり、竹の選定、ひごづくりから製作まで、すべて独学で始めている。

竹の選定は、一日中陽の当たらない赤土に育つ真竹で、節目が水平になるといわれる新月の夜に、一年分の竹を伐採する。また、ひごづくりは、愛用の短刀ひとつで、2ミリ程度の極細のひごに仕上げしており、長年の経験と勘が必要である。

特に、氏の製作した籠は、鮎など魚を傷つけないよう籠の内側部分が、底から数センチ上まで竹の表面にするなど工夫されており、籠づくりに対する情熱がうかがえる。

製作するなかで最も神経を使うところは、最終段階で籠の胴部分に、熱湯で曲げられた横骨を差し込んでいくところと籠の口の部分を薄く削った淡竹で巻き上げていく作業であり、籠のできの良否を左右し、熟練した技術が必要である。

現在、籠の製作は、年に数個と僅かであるが、この数少ない籠を日高川で、大公望たちの腰に見受けられる。



職 種：大松流有田かご製作
住 所：和歌山県日高郡中津村（現：日高川町）
生 年：明治37年

平成7年度 和歌山県名匠

は せ が わ と き か ず

長谷川 時 和

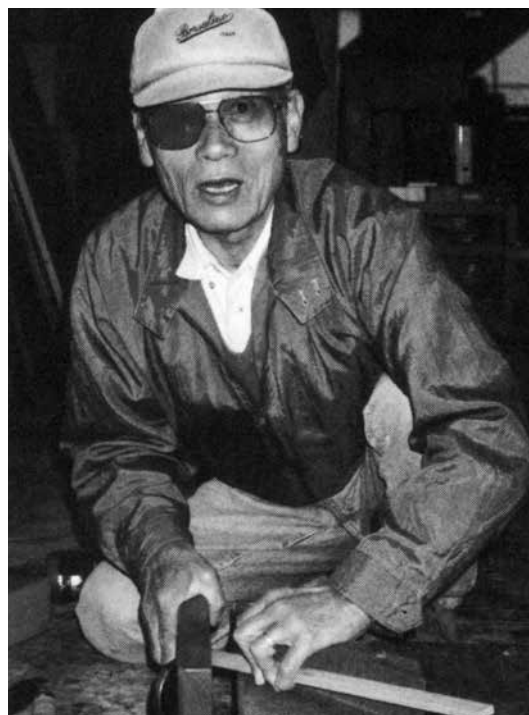
◎ 業績及び経歴

大正13年に海南市で生まれる。14歳で大阪市の辻定木工所に家具工として入り、約10年間家具製作技術を習う。その後、郷里海南に帰り、長谷川木工所を開業し、今日まで58年余、技能の研鑽に励み、卓越した技能を身につけ、木製家具の製造に努めている。

氏が製作する木製家具は、すべて注文によるもので、受注後は、自ら企画し、デザイン、製造までを長年の経験と昔ながらの伝統的な手づくりの技法で製作に当たってこられ、代表的な作品としては、昭和37年、天皇皇后両陛下の行幸啓に際し、お使いになられた机、椅子を始め、和歌山県議会本会議場や海南市議会本会議場といった厳粛で気品が求められる特殊家具の製作などが挙げられる。

近年、家具製作技術の高度化が要求されるなか、氏は、本来の研究熱心さと創意工夫により、輸入家具の国産化などの工作法と作業の合理化に努力し、県内外から高く評価されている。

昭和41年に和歌山県洋家具商工業協同組合理事に就任以来、同副理事長として、業界の発展と後進の指導に寄与し、多大な功績を残しており、昭和56年に和歌山県技能賞を受けるほか、平成3年には労働大臣表彰を受賞している。



職 種：木製家具製造

住 所：和歌山県海南市

生 年：大正13年

平成8年度 和歌山県名匠

たま き ふ み
玉 置 フ ミ

◎ 業績及び経歴

大正9年大阪市で生まれる。幼少の頃から人形に興味を持ち、趣味として人形を作っていたが、昭和40年の伝統工芸展の鑑賞を契機に本格的に人形づくりに取り組むことを決意。

京都在住の平中歳子氏に20年間師事するなど、30余年にわたり今日まで技能の研鑽に励み、人形づくりに惜しまぬ努力を注いでいる。

その間、氏の手によって命を得た作品は、京展のあかね賞の受賞や伝統工芸展に入選するなど数々の賞を受賞することとなる。

強靱なこうぞの繊維の可^か塑^そ物により形づくりを行う氏は、木^も芯^{しん}桐^{とう}塑^そ、桐^{とう}塑^そ、張り子、張り子切目込みなど様々な技法を駆使し、デッサンから塗りまですべて手作業で制作を行っている。

一体の人形を制作するのに3ヵ月以上を要し、また梅雨時には、作業が制限されることもあり、年間の制作量は3体程度である。

「人形づくりは対象作品の気持ちを理解し、まじめで優しい気持ちで取り組むことが大切」と語る氏の作品には、その温和な性格がそのまま表現されている。

時代の流れにいつしか失われかけた和人形の本当の美しさを、自らの地道な研鑽により現在に表現している氏の功績は、大きいものがある。



職 種：人^{じんぎょう}形^{ぎょう}づくり
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：大正9年

平成8年度 和歌山県名匠

で ぐち じょう じ 出 口 讓 爾

◎ 業績及び経歴

昭和9年海南市で生まれる。昭和27年「自分自身で思いきり出来る仕事」として家業である加飾業に入り、父の手ほどきを受ける。その後、昭和32年には京都在住の東端真笹氏に師事し5年間技術の研鑽に努める。

27歳で帰郷し、本格的な漆芸家として歩み始め、以降40余年、制作活動に精進している。

漆を塗った上に金銀粉または色粉などを蒔きつけて、器物の面に絵模様を表す日本独自の漆工美術である蒔絵は、緻密且つ精妙極まる独特の技術を要するものである。

氏は、その卓抜した技能により、現在、蒔絵業界の中で第一人者として活躍しており、その作品は、日展工芸部に7回、日本現代工芸美術展に7回、新日本工芸展に3回入賞するなど、全国的に高く評価されている。

一方で、明治中期に考察されたミカン漆器についても中嶋平吉氏に師事し、その技術を習得するなど漆器のデザインの改善向上にも努め、また昭和57年より6年間伝統工芸後継者育成事業の講師を務め後継者育成に尽力するなど、漆芸に対する深い情熱により伝統文化の継承に惜しまぬ努力を注いでいる。

昭和63年 伝統的工芸品産業振興協会より伝統工芸士に認定される。

平成8年 近畿通商産業局長より伝統的工芸品産業功労者等に対する局長表彰を受ける。



職 種：加飾（蒔絵）

住 所：和歌山県海南市

生 年：昭和9年

平成9年度 和歌山県名匠

しん や とら お
新家 虎雄

◎ 業績及び経歴

大正10年高野町に生まれる。自らが山で種子を採取し育て上げるなど、林業で木に接するうちに、昭和25年より木工品制作に取り組む。

氏は、山で学んだ木に対する知識と、木工品制作にかける情熱により、製材の手法を始めとし、製作工具の考案に至るまで多くを独学で修得し、独自の技術を養ってきた。

作品に使用する木の種類は、柘植・楠・檜・榲つげなど様々だが、生まれ育った高野山周辺に多数ある杉を最も好んで使用している。

その作風は、永年風雪に耐えてきた原木の年月とともに刻み込んできた様々な木目を活かし、氏が培ってきた独自の技法により、素材を育てきた大自然の息吹を感じる作品に仕上げている。

また、常に現状に満足することなく、新しい技法を編み出すため、鹿児島県の屋久島の素晴らしい杉や北海道の白樺など、全国各地の木々をその背景を含め研究するなど、その制作のためには、寝食を惜しまない。

この様な、氏の作品やその人柄に魅せられた後進には、その技術を惜しみなく伝えるとともに、次代を担う子供達には、紀の国和歌山の自然に育まれた木々に親しんでもらうため、夏の高野山の林間学校にやってくる子供達に竹細工や木工細工を教えている。



職 種：木工品制作
住 所：和歌山県伊都郡高野町
生 年：大正10年

平成 10 年度 和歌山県名匠

た さか いち ろう
田 阪 一 郎

◎ 業績及び経歴

昭和4年新宮市に生まれる。幼少の頃、父から贈られた玩具のオペラグラスにより、光が屈折し焦点に集まり像を描くという、レンズの持つ特性に興味を持つ。

その後、旧制新宮中学校在学中に学徒動員先の和歌山市で、天体望遠鏡の製作方法と天体観測を記した書籍に出会い、幼少のころの出来事を思い出すとともに、その魅力に惹かれる。

戦後、帰郷し家業であるみかん栽培の傍ら、天体観測に取り組むため、反射望遠鏡を購入するも、そのレンズの精度に満足せず自ら製作に取り組む。

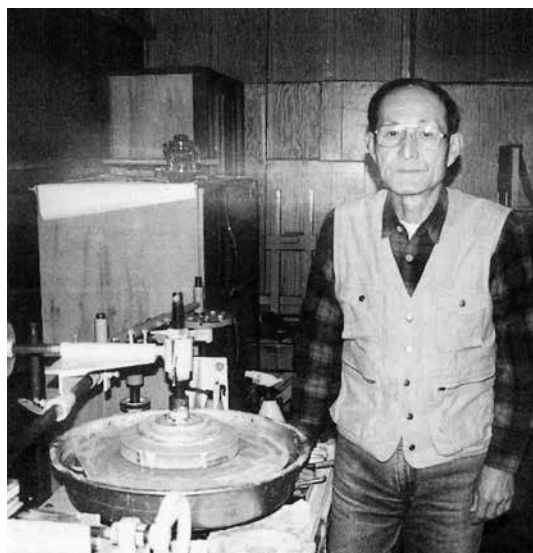
当時は、材料が少ないうえ情報もないという環境であるがため、製作方法や用具、また原材料に至るまで、自らが試行錯誤しながら、知識と技術を蓄えていくこととなった。

こうして、自分のために製作するうちに、その知識と技術に支えられた高い精度が評価を得て、氏のもとには、レンズ製作の依頼が来るようになる。

氏がその情熱と技術を限りなく注ぎ込んで製作した数百に及ぶレンズは、多くの天文台や既製レンズでは満足しない天文家に高い評価を受け、その技術は海外の科学雑誌に紹介され絶賛されるに至った。

また氏は、40年余にわたる自作の反射望遠鏡を使った天体観測の傍ら、地域の子ども達に観測会を開催したり、各地のアマチュア天文家にその技術を伝授するなど、天文学の普及に多大な貢献をしている。

平成10年8月には、こうした活動を高く評価した後輩達が、氏に“星”を贈るため、国際天文連合・小惑星中央局（米国）の小天体命名委員会に働きかけた結果、5年前に発見された小惑星が「Tasaka (6873)」と命名され、同委員会会報紙上で発表された。氏の業績を讃えたその名は多くの偉人達の名前とともに、夜空に輝くこととなった。



職 種：反射望遠鏡^{はんしゃぼうえんきょう}レンズ^{せいさく}製作

住 所：和歌山県新宮市

生 年：昭和4年

平成 10 年度 和歌山県名匠

やま ぐち い さ お こうほう
山 口 伊左夫 (号 光峯)

◎ 業績及び経歴

昭和 19 年那智勝浦町で那智黒硯製作を営む父のもとに生まれる。

この那智勝浦町に隣接する新宮市の大浜海岸や佐野海岸には、古来から那智黒石が存在し、平安時代以降、この地を訪れた人々が、那智参詣の証としてこの石を持ち帰ったと伝わる。

那智黒石は、粘土質を多く含む泥が固結して生じた堆積岩の一種であり、黒色かつ緻密な岩石で、硬質なため、こうして各地に持ち帰られた石が、硯や試金石、黒碁石として活用されてきた。

氏は 18 才の高校卒業と同時に、原石の自然な姿を活かした那智黒硯の製作を父から手ほどきを受け、原石の採取から形づくり、彫りや磨きに至るまで、多種にわたるノミや砥石を巧みに使い分け、硯の製作に取り組んできた。

その製作は、硯の文字のごとく、石の特性を見極めることに始まり、終わると言っても過言ではない。

この様な、石の特性を見極め、硯の製作に取り組むなかで、氏は、堆積岩である那智黒石のうち珠石と呼ばれる、核を中心として周辺に堆積した那智黒石が、特に硯石としての特性に優れていることを見出し、それまでの作風を打破し、珠石の素材を活かした楕円状の硯を製作した。この硯は、手にすると伝わる氏の温かな人柄と製作にかける情熱から、多くの書道家に好評を得ている。

この珠石で硯を製作するためには、その性質が那智黒石の中でも特に硬質であるため、彫りや磨きに多くの時間を必要とすることにより、他に製作している者はいない。

地域に伝わる伝統工芸品である那智黒硯に新たな息吹を加え、その普及と魅力を次代に伝えるため、氏は現在もその技術を磨き続けている。



職 種：那智黒硯製作
住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町
生 年：昭和 19 年

平成 11 年度 和歌山県名匠

にっ た よし お きうん
新 田 義 雄 (号 紀雲)

◎ 業績及び経歴

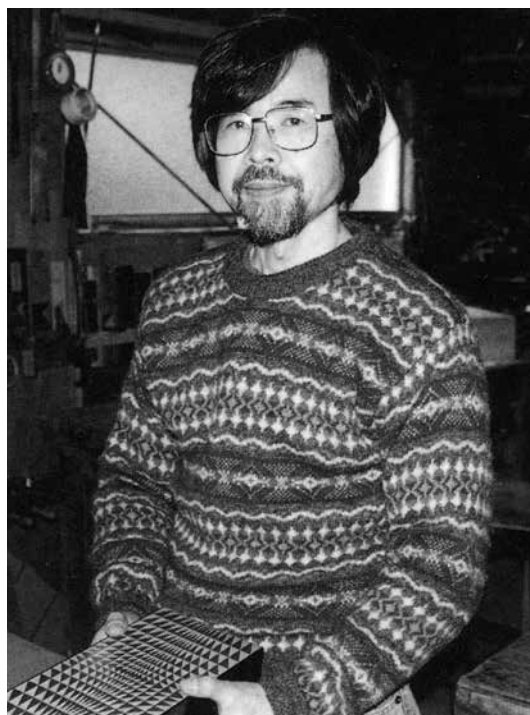
県内の工業高校卒業後、大阪の電機会社に就職するが、一生涯の仕事として指物の道を志し、昭和 46 年より指物師であった父に師事し、伝統ある唐木指物の技法を受け継いだ。

昭和 55 年の独立後、工芸作家の登竜門といわれる日本伝統工芸展への出品などを通じて、日本の伝統的な工芸の品格の高さや高度な技術に感銘を受け、独自の道を極めるべく精進を重ねた。

昭和 58 年に、全国伝統的工芸品展の最高賞である「内閣総理大臣賞」を受賞し、昭和 61 年には日本伝統工芸展において「紀州の海をモチーフにした高度な象嵌の技術である」と高い評価を受け、初入選を果たした。

その後も、さらにその技術を磨き続け、和歌山県美術展覧会をはじめ、様々な展覧会において数々の入賞を果たすなど、その作品が全国的に評価され、平成元年には日本工芸会正会員に認定された。

氏の作品は、飾り箱や茶道具などに高度な象嵌を施したもので、好んで使う材料の紫檀が異彩を放っており、「今後も木の持つ温もりを大切にしながら、自分らしい作品を創っていきたい」とのお考えのもと、後世に残る作品を生み出すべく、新たな作品づくりに取り組んでいる。



職 種：唐木指物師

住 所：和歌山県有田市

生 年：昭和 19 年

平成 12 年度 和歌山県名匠

おか だ よし まさ
岡 田 義 正

◎ 業績及び経歴

昭和 8 年広島県で生まれる。16 才で道法木工所に入社し、家具製作全般の基礎技術を修得する。

37 才で独立し、和歌山市で岡田木工所を設立する。以後、紀州桐箆筒の高度な伝統技法を守りつつ、独自の技法も考案し発展させてきた。

確かな技術によって生み出される氏の作品は、伝統工芸品としての品格を有しながら、随所に施された細工から氏のきめ細やかな心配りが感じられる。

また、伝統的な桐箆筒のスタイルに新しいデザインを巧みに取り入れるなど創作活動にも精力的に取り組んでいる。

昭和 51 年に京都府家具組合連合会優秀賞を受賞したのをはじめ、伝統工芸品展奨励賞など数々の賞を受賞、平成元年には、伝統工芸士の称号を受けた。

昭和 60 年からは、紀州桐箆筒協同組合副理事長を務め、後進の育成や業界の発展にも力をそそぎ、昭和 62 年に紀州箆筒が国から伝統工芸品の指定（「伝統的工芸品産業振興法」に基づく。）を受けるのに貢献した。

こうした功績が認められ、平成 10 年に通商産業大臣表彰（伝統的工芸品産業功労者）を受賞している。



職 種：きしゅうきりたんすせいさく紀州桐箆筒製作
住 所：和歌山県那賀郡貴志川町（現：紀の川市）
生 年：昭和 8 年

平成 12 年度 和歌山県名匠

まつのひら よし はる しょうほう
松之平 義 治 (号 松芳)

◎ 業績及び経歴

昭和3年海草郡美里町（現：紀美野町）で生まれる。同じく木地師であった父より挽物加工技術を修得し、28才で独立した。

当時、数十名いた木地師もプラスチック素材の導入等により年々減少していくなかで、祖父の代より引き継がれてきた技法を守りながら一貫して手挽きによる木製木地を製作してきた。

挽物加工は、「削り」と「乾燥」を何度も繰り返し、根気と集中力を必要とする作業である。

また、素材となる木材の選別に始まり、加工に使用する刃物も試行錯誤を繰り返しながら自ら作る必要があり、永年の経験と熟練の技が要求される。

木と対話しつつ、数種類の刃物を巧みに使い分けながら削り出される氏の作品は、ミリ単位以下の精度で仕上げられ、年月が経っても歪みが出ないため漆器業界から高い信頼と評価を得ている。

近年は、製作現場の第一人者として、和歌山県工業技術センターの研究開発に協力するとともに、木目を活かした木の温もりが感じられる花器の製作を手がけるなど、新製品の開発と販路の拡張にも取り組み、挽物加工技術の継承、発展に努めている。



職 種：紀州漆器木地師
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：昭和3年

平成 13 年度 和歌山県名匠

じょう じゅん いち ぎょしゅう
城 純 一 (竿銘 魚集)

◎ 業績及び経歴

大正 14 年福岡県で生まれる。昭和 12 年に製竿師“源竿師”^{げんかんし}に入門し、ヘラ竿づくりの道を歩み始めた。

昭和 21 年に独立するとともに、「魚集」の銘を名乗る。以後、永きにわたり、製竿師として精進を積むとともに、幾多の技法の考案、改善により生産能力の向上と発展に努めてきた。

特に、火入れの工程に強火焼き入れ工法を初めて取り入れ、竹のしなやかさを残しつつ、竹の強度を増すという相反する効果の両立に成功した。

また、竿の意匠にも工夫を凝らし、握り部分の先端から籐を巻き上げる「渦巻き握り」を考案するなど芸術性に富んだ作品を作り出した。

昭和 55 年から 2 年間と平成 7 年からの 3 年間、紀州製竿組合の組合長を務めるなど本県製竿業界の発展に貢献するとともに、現在までに 5 人の弟子を育成するなど後進の指導にも尽力している。

昭和 59 年に和歌山県技能賞を受賞している。



職 種：^{せいかんし}製竿師

住 所：和歌山県橋本市

生 年：大正 14 年

平成 14 年度 和歌山県名匠

たま い また じ
玉 井 又 次

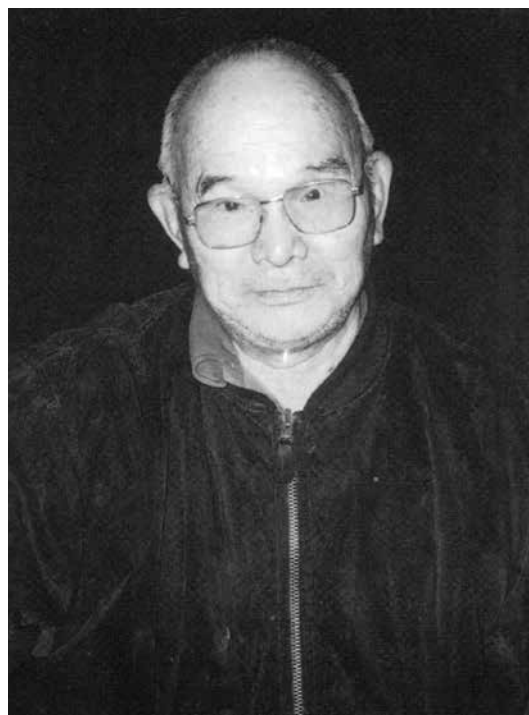
◎ 業績及び経歴

大正 15 年日高郡清川村（現：みなべ町）で生まれる。昭和 13 年に製炭業に就くが、昭和 15 年に海軍に入隊。昭和 23 年に復員後、日置川町（現：白浜町）に居を定め、紀州備長炭の製炭を始める。以後、西牟婁木炭協会、和歌山木炭協会、日置川町木炭生産組合の役員を歴任している。

紀州備長炭の炭窯構築法・製炭技術・炭質は、県内だけではなく、全国的に有名で、作業工程の中で炭窯に空気を送り込み、窯の内部の温度を 1000 度以上にする「精錬」の巧拙が炭の良し悪しを決める。しかし、窯の内部は見えないため、気象条件を勘案しながら、窯から出る煙の色と匂いで炭の状態を判断し、作業を行う。これには、長年の経験と勘、熟練した技術が必要になる。氏は、平成 4 年に紀州備長炭指導製炭士の認定を受け、その卓越した技術が高く評価されている。

また、内弟子数名を 1～2 年間窯場に宿泊させて製炭技術を教えるなど、後継者の育成に情熱を傾け、体験型観光として炭焼き体験を一般の人にも指導するなど、紀州備長炭の普及にも尽力している。

平成 2 年に「県知事感謝状」、平成 6 年に「県知事表彰（農林功劳）」、平成 7 年に日本特用林産振興会から「特用林産功労者賞」を受賞し、平成 14 年には（社）国土緑化推進機構から「森の名手・名人 100 人」に選ばれている。



職 種：紀州備長炭製炭士
住 所：和歌山県西牟婁郡日置川町（現：白浜町）
生 年：大正 15 年

平成 14 年度 和歌山県名匠

なか

仲

たもつ

完

◎ 業績及び経歴

大正 15 年東牟婁郡勝浦町（現：那智勝浦町）で生まれる。15 歳から地元の船会社に見習い工として勤務を始め、今日まで 60 年あまり、この道一筋に精進している。昭和 21 年からは船大工職人として各地に出向し、木造船の建造、修理に携わり、昭和 30 年に仲造船所を設立。

昭和 60 年、それまで培ってきた技術を活かし、那智勝浦町勝浦八幡神社の權伝馬船 2 隻を建造し、以後、伝馬船の維持修理を含め、同神社例祭の權伝馬神事を支える。平成 5 年には補陀洛渡海信仰の渡海船の復元建造を果たし、平成 14 年には新たに權伝馬船 1 隻を建造した。

木造船は 1 隻を建造するのに、約 80 日から 100 日かかる。以前は大型マグロ船なども木造であり、10 年程前まで木造船はよく建造されていたが、近年は FRP（強化プラスチック）船が普及したため、木造船の需要が減少している。そのため、船大工も減少しており、今では那智勝浦町だけでなく、串本、古座や新宮方面の木造船の建造、修理まで氏が手掛けている。

木造船建造技術を途絶えさせることなく後世へ伝承することが全国的な課題となっている昨今、高齢を顧みず培ってきた木造船建造技術を活かし、熊野地域の諸行事を支えてきた氏の功績は多大である。



職 種：船大工ふなだいぐ

住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

生 年：大正 15 年

平成 15 年度 和歌山県名匠

あずま ひろ み
東 浩 美

◎ 業績及び経歴

昭和 19 年西牟婁郡白浜町で生まれる。昭和 36 年に和歌山職業訓練所木工科修了後、同年に見習いとして建具工の道に入る。

昭和 45 年に独立し、重要文化財旧柳川家住宅・旧谷山家住宅の建具修理に従事したのを皮切りに、今日まで数多くの伝統的工法による建具の補修と製作に携わっている。とりわけ、県内の国宝や重要文化財などの文化財建造物については、補修や新調などの重要な建具工事を多く手掛けてきた。

昭和 47 年に国宝長保寺本堂、昭和 60 年に重要文化財増田家住宅、平成 3 年に重要文化財道成寺本堂、平成 7 年に重要文化財普賢院、平成 10 年に国宝金剛峯寺不動堂の建具製作補修を行い、現在は、重要文化財旧中筋家住宅の修理工事に携わっている。

建具工の仕事は、常に神経の細かい繊細な技術が求められる。さらに古建築の修理にあたっては、各時代のあらゆる建具に関する豊富な知識と深い理解が必要である。氏は、長い経験の中でこれらの知識と卓越した技術を習得した、数少ない貴重な文化財を扱う建具工の一人である。

昭和 56 年には和歌山県技能賞を受賞している。



職 種：たてぐこう 建具工（ぶんかざいほぞんしゅうり 文化財保存修理）

住 所：和歌山県和歌山市

生 年：昭和 19 年

平成 15 年度 和歌山県名匠

く せ せい ご
久 世 清 吾

◎ 業績及び経歴

昭和 12 年海南市で生まれる。祖父の代から漆器沈金師であった家系に生まれ、16 歳の時、父の久世一雄氏の厳しい指導で、漆器沈金の道に入る。

沈金とは無地の漆器の表面にノミで模様を彫り、金箔を埋め込む伝統的技法であるが、氏は 50 年余り沈金に取り組み、県内では数少ない漆器沈金師として技術の研鑽に励むとともに、後進の指導育成等紀州漆器の普及・発展に努めてきた。

昭和 52 年頃から東京や大阪などのデパートで実演を行い、各地で沈金ファンを増やしてきた。また地元では、紀州漆器伝統産業会館の漆器蒔絵体験ハウスの講師や伝統工芸品教育事業の講師等を率先して担うなど小・中・高校生をはじめ幅広い層に、紀州漆器を広めていこうと日々努力を惜しまず尽力し、その功績は多大である。

また平成 14 年に JR 海南駅にある海南市の物産観光センターで沈金実演・作品展を行った際、生徒達と共に書道と沈金を組み合わせた作品を完成させ、伝統技術をいかした斬新的な作品を披露し、話題を呼んだ。

平成 11 年に伝統工芸士に認定され、平成 15 年には近畿経済産業局長表彰を受賞している。



職 種：漆器沈金師

住 所：和歌山県海南市

生 年：昭和 12 年

平成 16 年度 和歌山県名匠

おお かわ おさむ
大 川 治

◎ 業績及び経歴

昭和 11 年新宮市で生まれる。祖父の代から鍛冶職であった家系に生まれ、17 歳の時、父の大川啓氏の厳しい指導で、鍛冶職の道に入る。

熊野地方の鍛冶の伝統は古く、最盛期には、新宮市内で約 30 軒の鍛冶屋があった。しかし、山林業の衰退やチェーンソー等の機械化が進むにつれて、鍛冶屋は減少し、現在では氏だけが鍛冶職人として伝統の灯を守り続けている。

鍛冶の工程は、刃物地鉄を所定の大きさに切断し、刃の部分となる鋼を加えてから、製品の形に整えていき、グラインダー等で形を仕上げる。99%完成したら、炭火で熱し、水で急激に冷やして硬くしていく焼き入れを行い、最後は、砥石を使用して刃付けを行い完成させる。どの作業工程も、微妙な加減で仕上がりの質が大きく違ってくる。

氏の製品は、オーダーメイドものが多く、使用する人に応じた形や重さ、性能や耐久性を常に考えながら製作し、長年の経験で体得した感覚と熟練した技術は、まさに匠の技である。

平成 14 年に、野鍛冶刃物は県知事が指定する「県郷土伝統工芸品」に選定されている。



職 種：鍛冶職かじしよく

住 所：和歌山県新宮市

生 年：昭和 11 年

平成 16 年度 和歌山県名匠

の だ のぶ お
野 田 信 男

◎ 業績及び経歴

昭和 23 年現東牟婁郡那智勝浦町に生まれる。

16 歳の時に熊野那智大社の宮大工としてその道に精進し、その後、約 25 年間にわたって「那智の火祭り」に使用する松明・扇神輿の製作に努めている。

那智滝籠もりの熊野修験が伝承した「那智の火祭り」は日本三大火祭りの一つにも数えられ、神々の熊野那智大社から那智の御滝前の飛瀧神社への年に一度の里帰りを表したもので、12 体の熊野の神々を、那智の御滝の姿を表した 12 体の扇神輿に移し、御本社より御滝へと移動し、御滝の参道で松明がお迎えし、その炎で清める神事である。

古代人の力強い姿を想起させる壮絶かつ幻想的なこの火祭りは、躍動的な力で観る人を圧倒させ、熊野が培ってきた歴史や文化を体感することができる。

氏はこの火祭りで使用する幅 1m、長さ 6m 程の 12 体の扇神輿と、熊野那智大社社有林の檜を使用した重さ 50 キロにもなる大松明を、長年の勘と確かな技術で、ほとんど一人で製作している。また、伝統技術を継承すべく後進の指導育成にも尽力しており、熊野の伝統を後世に残していく上で、なくてはならない貴重な存在である。



職 種：たいまつ おうぎ み こしせいさく松明・扇神輿製作
住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町
生 年：昭和 23 年

平成 17 年度 和歌山県名匠

は やま なお ゆき
羽 山 直 幸

◎ 業績及び経歴

昭和 6 年日高郡由良町で生まれる。昭和 23 年に海南市の漆芸の公共訓練所に入学し、蒔絵についての知識を学ぶ。その後、和歌山市の表具師内田義仲氏に弟子入りし、表具師の道に入る。

厳しい修行時代を経て、昭和 43 年から自宅で表具店を経営し、昭和 45 年には表具技能検定一級試験に合格する。

表具師の仕事は、痛んだ掛け軸や屏風などの修復から、襖や障子などの建具関係の新調や修理など多岐にわたるが、どの作業も非常に複雑で、経験と熟練した技術が必要である。

特に、氏は、蒔絵技法という伝統的な保存技術を用い、数多くの寺社仏閣の宝物修理を行っている。主な修復文化財としては、称名寺蔵「良如上人画」、東泉寺蔵「仏涅槃図」、興国寺蔵「仏涅槃図」、念興寺蔵「親鸞上人掛軸」、蓮専寺蔵「親鸞上人一代記画」などが挙げられる。さらに、遠方からも修復の依頼があり、氏の技術の高さが窺い知れる。

また、日本文化の伝統技術保持者としても優れており、蒔絵技法と表具の技術を活かして獅子舞の獅子頭制作に取り組み、氏の制作した獅子頭が周辺市町村で利用され、由良町の県指定無形民俗文化財の獅子舞にも使用されている。

昭和 61 年に由良町教育委員会感謝状を、平成 13 年に由良町文化功労賞を、平成 14 年には和歌山県のふるさと名人紀の人賞を受賞している。



職 種：表具師ひょうぐし

住 所：和歌山県日高郡由良町

生 年：昭和 6 年

主な表彰歴等

平成 13 年 由良町文化功労賞

平成 14 年 和歌山県ふるさと名人紀の人賞

平成 17 年度 和歌山県名匠

やぶ た ぜん すけ
藪 田 善 助

◎ 業績及び経歴

昭和 17 年有田郡吉備町（現：有田川町）で生まれる。花火師の家系に生まれ、幼い頃より、父善一氏の仕事を見て育つ。中学を卒業後、三重県亀山市の伊藤煙火工業株式会社に入社し、本格的に花火師の道を歩み始める。昭和 35 年には父が経営する藪田煙火工場（現在の有限会社紀州煙火）で働くようになり、親子で花火製作に取り組み、父の下で修行を積むことになる。

平成元年には、亡き父の跡を継いで有限会社紀州煙火を経営することとなり、花火製作に打ち込むとともに、打上煙火と音楽を組み合わせ、コンピュータ制御で打上げるなど、新しい花火の手法を意欲的に取り入れてきた。

現在、有限会社紀州煙火は和歌山県内唯一の煙火製造事業所であり、県内の花火大会の 7 割近くを担当し、和歌山の夜空を彩り、観客に多くの感動を与えている。また、花火の製造から打上げまでのすべての工程を行っており、県内外を含めて年間約 3 万発の花火を打上げている。

平成元年より、社団法人日本煙火協会和歌山県支部支部長を務め、平成 16 年からは三重県支部との合併により三和支部副支部長を務める。煙火業界の発展に寄与し、打上従事者の保安教育に尽力するなど、その功績は大きい。

平成 15 年には、女性花火師である娘とともに和歌山県のふるさと名人紀の人賞を受賞している。

父親の藪田善一氏は、昭和 55 年の和歌山県名匠表彰受賞者であり、親子二代での受賞となる。



職 種：花火師
住 所：和歌山県有田郡吉備町（現：有田川町）
生 年：昭和 17 年

主な表彰歴等

平成 15 年 和歌山県ふるさと名人紀の人賞

平成 18 年度 和歌山県名匠

うえ むら まこと
上 村 誠

◎ 業績及び経歴

昭和 42 年に高校を卒業後、茶栽培及び製茶技術を習得するため、静岡県榛原町（現：牧ノ原市）の茶専業農家において研修指導を受け、以来 39 年にわたり茶業に携わっている。

1 年半の研修後は郷里の日置川町川添地域（現：白浜町市鹿野）において地域特有の気象条件を活かした「川添茶」の栽培を農業経営の中心に据えて、その品質向上のため、製茶技術の研究と改良に精力を注ぎ続けている。

特に手もみ製茶技術については、平成 10 年に全国手もみ茶振興会より「師範」に認定されるなど、その高い技術力が認められており、川添地域の製茶技術をリードする存在といえる。

また、昭和 49 年より現在に至り会長を務める「川添緑茶研究会」では、茶栽培技術及び経営の向上に取り組む一方、全国手もみ茶品評会において平成 8 年から平成 15 年までの 8 年連続で上位入賞を果たすなど、零細な産地でありながら製茶技術にかけては全国でも高い評価を得ている。

日本有数の茶産地である静岡県の市場の中でも、高品質の川添茶は人気が高く、平成 16 年と平成 17 年の世界緑茶協会主催 O-CHA フロンティアコンテストでは、氏の出品した茶が連続して金賞を受賞している。

平成 8 年に和歌山県の地域興しマイスターに、平成 11 年に和歌山県指導農業士に、平成 17 年には財団法人日本特産農産物協会の地域特産物マイスターに認定される。また、平成 12 年には和歌山県知事表彰を受賞している。氏は、地場産業の育成には欠かせない人材であり、後進の指導育成に尽力するなど、その功績は大きい。



職 種：製茶（手もみ茶）

住 所：和歌山県西牟婁郡白浜町

生 年：昭和 24 年

主な表彰歴等

平成 8 年 和歌山県地域興しマイスター認定
平成 11 年 和歌山県指導農業士認定
平成 12 年 和歌山県知事表彰
平成 17 年 地域特産物マイスター認定（財団法人日本特産農産物協会）

平成 18 年度 和歌山県名匠

つ だ みつ お し ほう 津 田 満 雄 (竿銘 至峰)

◎ 業績及び経歴

昭和 21 年にへら竿の創始者児島光雄（竿銘：師光）の一番末の弟子として入門し、製竿師の道に入る。2 年半の修行期間中、その殆どを竿の材料となる原竹の選別に費やし、良質の竹を選ぶ目や感覚を養った。

昭和 23 年に「光作」銘で独立し、その後の昭和 28 年に「目標を高く定め、いつかは高峰に立とう」と現在の「至峰」銘に改名する。

優れた製品をつくるためには良質の素材原竹が必要であるが、原竹の選別には特に厳しい。へら竿は 3～5 本を継ぎ合わせて使うが、先端の穂先は真竹、2 番目の穂持ちはスズ竹、3～5 本目は矢竹と、使う竹の種類が異なり、中でも竿全体の性能を決める穂持ちの竹の選別は氏自身が山へ赴き切り出す。

すべての製作工程は一人での手作業で行い、道具も竿作りに適した特殊工具を自ら考案するなど、職人としての自らの仕事に妥協がない。

氏が作る竿は、「魚を釣る」という竿本来の機能を重視し、余分な装飾はほどこさない。魚を取り込みやすい穂先の調子、釣った時に竿全体がつくる形のよさ、握り部分の持ちやすさなどを重視しており、シンプルが故の無駄のない美しさがある。

厳選された原竹を用いて先調子きまじょうしに組み上げられた、こだわりのへら竿「至峰」は、その機能美と釣り味の良さで多くの釣り師を魅了し、全国で高い評価を得ている。

昭和 52 年に和歌山県技能賞、平成 5 年に労働大臣卓越技能賞、平成 16 年に黄綬褒章を受章し、昭和 44 年・45 年には紀州製竿組合長を務めるなど、業界に多大な貢献をしている。



職 種：製竿師せいかんし

住 所：和歌山県伊都郡九度山町

生 年：昭和 4 年

主な表彰歴等

昭和 52 年 和歌山県技能賞
平成 5 年 労働大臣卓越技能賞
平成 16 年 黄綬褒章

平成 19 年度 和歌山県名匠

くわ ぞえ いさ お
桑 添 勇 雄

◎ 業績及び経歴

代々、棕櫚製品の製作に携わっていた家業を継ぎ、戦後、棕櫚製品の製作を始める。先代は、綱（ロープ）を主に製作していたが、氏が箒の製作を始め、以来、箒づくり一筋である。

野上地方の棕櫚産業の起源は、江戸時代末期からと言われており、明治末期から大正期にかけ、生産は最盛期を迎えたが、パームの輸入や化学繊維の出現により棕櫚製品の生産は減少を続けており、現在、県内で鬼毛による棕櫚箒の製作技術を伝承しているのは、氏一人となっている。鬼毛とは、棕櫚皮の太い繊維で、幅20センチメートル・長さ60センチメートルほどの棕櫚皮一枚あたり5～6本しか取れない貴重な繊維であり、それを抜き集めることから棕櫚箒の製作は始まる。

平成13年度に和歌山県紀の人賞、平成18年度には財団法人伝統的工芸品産業振興協会による伝統的工芸品産業功労者褒賞を受賞するなど、その製作技術は高い評価を受けている。また、平成16年度には、棕櫚箒が、和歌山県郷土伝統工芸品に指定された。

棕櫚箒の製作は全てが手作業であり、その芸術的な様相も相まって、氏の製作する丸星印の棕櫚箒は、市場における評価も非常に高い。

また、伝統産業を守るため、来客者に対する技術の公開や製品の紹介なども積極的に行っている。



職 種：棕櫚箒製作しゅうろうぼうせいさく

住 所：和歌山県海草郡紀美野町

生 年：昭和3年

主な表彰歴等

平成13年度 和歌山県紀の人賞

平成16年度 和歌山県郷土伝統工芸品
「棕櫚箒」指定

平成18年度 伝統的工芸品産業功労者褒賞
(財団法人伝統的工芸品産業振興協会)

平成 19 年度 和歌山県名匠

みつ づか あきら
三 塚 明

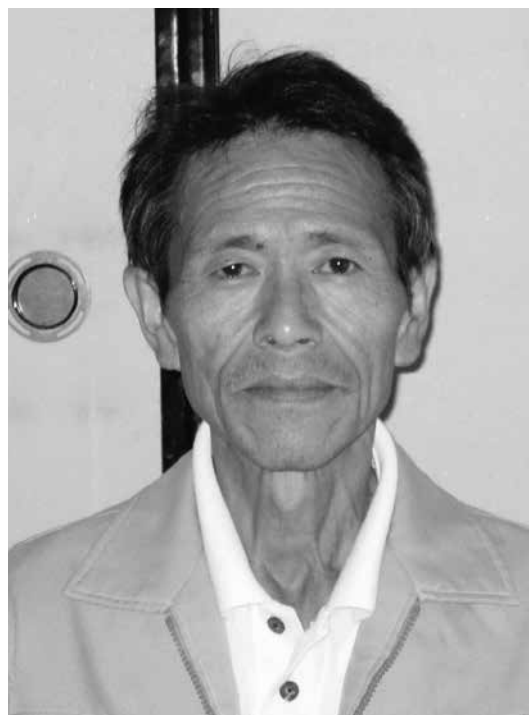
◎ 業績及び経歴

18歳で大工の道に入り、12歳年長である兄の元で木造住宅の新築等を手がけ、木についての基礎的、伝統的な大工技術を習得するとともに、自らの技の研鑽に励んだ。

36歳の時に、県下最大の門である重要文化財金剛峯寺大門の修復に参加する機会を得、それまで習得した技術を生かし、古建築修復の分野でその技を発揮した。以後、伝統建築修復の技術に習熟し、県内の多くの指定文化財建造物の修復に主導的な立場で携わり、現在に至っている。

修復に携わった主な建築物は、重要文化財道成寺本堂、重要文化財丹生都比売神社楼門、重要文化財長楽寺仏殿、重要文化財粉河寺本堂・大門、国宝金剛峯寺不動堂、県指定文化財力侍神社本殿、県指定文化財荒田神社本殿などがあり、長年の研鑽と経験に裏打ちされたその技は、県内の伝統建築の修復には欠かせない存在となっている。

氏は、一貫して一職人としての「大工」の道を歩み、上記の建築物は全て、大工としての技術力を見込まれ、職人あるいは棟梁として従事したものである。そして、その技術は「大工の技術」と言うよりは、「伝統建築の保存技術」と呼ぶに相応しいものである。氏の習得した技術は、歴史遺産としての「伝統建築（寺社建築）」を後世へと伝えるための「修復の技術」であり、それは当然「伝統木工技法」の習熟の上に位置づけられた新しい職種と言えるものである。



職 種：でんとうげんちくほ ぞんしゅうり 伝統建築保存修理

住 所：和歌山県紀の川市

生 年：昭和 22 年

主な表彰歴等

平成 9 年度 木工技能者研修上級コース認定
(財団法人文化財建造物保存技術協会)

平成 20 年度 和歌山県名匠

たに がみ なが てる

谷 上 永 晃

◎ 業績及び経歴

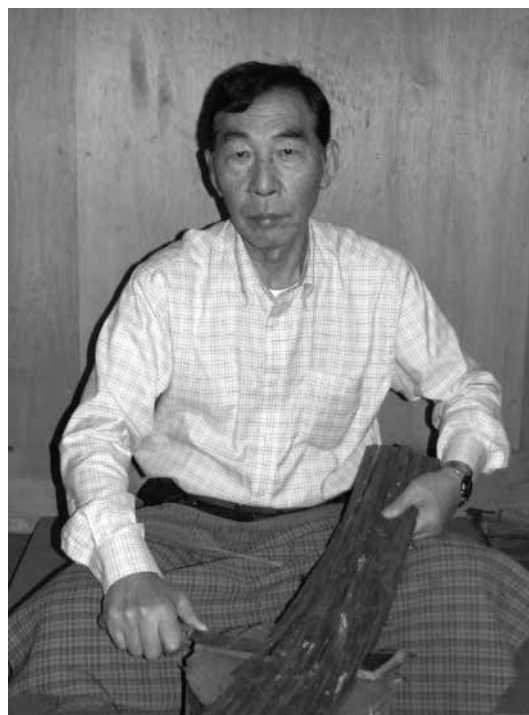
22歳から、祖父、父のもとで、檜皮葺、柿葺の屋根保存修理についての修行を積む。現在は谷上社寺工業の5代目として、全国各地の寺社の屋根保存修理工事を手掛けている。

檜皮葺は皮の採取、皮の加工、葺き作業の工程で行われる。葺き作業は、皮を1.2cmほどの間隔で葺き重ね竹釘で留めながら積み重ねていくもので、1日に葺くことができるのは、2.5㎡程度である。皮の加工は、葺き作業の倍以上の労力が必要であり、いずれも技術と根気が強く求められる。また、遠くから見たときに周囲の風景に溶け込んだ屋根のラインを美しく見せるため、ミリ単位の修正を行うなど、極めて熟練度の高い技術を要する作業を行っている。

これまで、熊野那智大社、那智山青岸渡寺本堂といった県内の重要文化財をはじめ、巖島神社（広島県）、室生寺（奈良県）、善光寺（長野県）など、全国の名だたる寺社の檜皮葺、柿葺の屋根を葺きかえており、伝統技術の継承、文化財保護に貢献している。

平成9年から12年まで、社団法人全国社寺等屋根工事技術保存会会長を務めるなど、技術の保存、後継者育成の活動に尽力している。現在は、文化財修理技術保存連盟（平成16年設立）の理事長として、さまざまな文化財修理の関係団体を取りまとめ、文化財保存事業の推進に取り組んでおり、こうした面での功績も多大である。

祖父の谷上伊三郎氏は、昭和54年度の和歌山県名匠表彰受賞者であり、その貴重な文化財保存技術は脈々と受け継がれている。



職 種：文化財修理屋根葺士（ふんかざいしゅうり やねふきし 檜皮葺・柿葺）
住 所：和歌山県橋本市
生 年：昭和22年

平成 20 年度 和歌山県名匠

にし はた たけし
西 畑 猛

◎ 業績及び経歴

15歳で和歌山市の中弥木工に入社し、紀州桐箆笥の製作を始め、以来53年間、この道一筋に専念してきた。現在は、昭和36年に入社した和歌山富士木工の工場長として指導的役割を果たしている。

紀州箆笥は、江戸時代末期には現在の和歌山市において箆笥の製造技術が確立し、生産が行われていたと考えられており、昭和62年には「伝統的工芸品」として国の指定を受けている。

美しい製品に仕上げるためには、材料となる、年輪の細くそろった美しい桐の^{まきめ}柁目材が必要であり、それを選別する目は特に厳しい。また、造材、板加工、組立といったすべての製造工程に精通し、手仕事で行うとともに、新旧両方の技術技法を用いて、すばらしい製品を製作している。かつての、機械がなく道具だけで製作していた時代の手技は、現在では極めて貴重な匠の技であり、そうした技術を持った職人は数少なくなってきた。

平成3年には、中心的役割を担い製作した紀州桐箆笥が、科学技術庁長官賞を受賞している。また平成6年には、財団法人伝統的工芸品産業振興協会による伝統工芸士の認定を受けている。

県外において、製作の実演や製品説明を積極的に行い販売促進に尽力しているほか、全国家具コンクールに参加出品するなど、紀州桐箆笥の産業振興に多大な貢献をしている。また、周囲の信頼も厚く、多くの伝統工芸士を育てるなど、後継者の育成指導にも力を発揮している。こうした功績が認められ、平成19年には、財団法人伝統的工芸品産業振興協会から伝統的工芸品産業功労者褒賞を受賞している。



職 種：紀州桐箆笥製作
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：昭和14年

平成 21 年度 和歌山県名匠

くり ばやし つねよ

栗 林 つね代

◎ 業績及び経歴

23歳から手漉き和紙「保田紙」の製作を始め、61年を経た現在も、有田川町の清水高齢者生産活動センターにて、力強く紙を漉き続けている。

保田紙の歴史は、約390年前の江戸時代に遡る。紀州徳川藩主から命を受けた先人が、工夫苦勞を重ね、完成させたものと伝わる。丈夫な紙質という特徴から、和傘の紙として使用され、地域活力の源となっていたが、昭和30年代頃から機械化や洋紙の進出により衰退していた。そうした中、伝統技術の復興、継承を目的に昭和54年に設立された当該センターで、当初から後継者の育成、子ども達への体験指導等に力を注いできた。手漉き和紙製作の技術を持つ職人が少なくなった今では、その技術を伝える第一人者として極めて貴重な存在となっている。

厚い和紙から薄い和紙まで、注文内容に合わせて様々な和紙を漉く。原料を混ぜ込んだ真水を桁（地元ではカテと呼ぶ紙漉き道具）に挟んだ簀すいですくい、揺らしながら思いのままに紙を漉き上げる。原料である楮こうぞと、美しい和紙に仕上げるための冷たい真水は、清水地域の自然と風土がもたらしめている。素早い動作でしわなく均一な厚さに和紙を漉き上げる熟練した手業は、長年の経験と勘に裏打ちされたまさに伝統技術そのものである。

平成13年に和歌山県ふるさと名人紀の人賞を受賞している。現在は、県外からの注文も多く、昔は使われなかった襖ふすまに使用されるなど、手漉き和紙の良さが再認識されつつある中、こうした手漉き和紙「保田紙」製作の伝統技術保存継承に果たされた功績は多大である。



職 種：手漉き和紙「保田紙」製作

住 所：和歌山県有田郡有田川町

生 年：大正14年

平成 22 年度 和歌山県名匠

かわ かみ やす かず
川 上 安 一

◎ 業績及び経歴

20歳の時、刀匠^{とうしやう}であった父に師事^{とぎ}し、研師の道に入る。以来42年にわたり研ぎ一筋に研鑽を重ね、和歌山県立博物館の赤羽刀、熊野那智大社宝物太刀をはじめとした多数の文化財、神社宝物、奉納太刀などの研磨を行う。今も県内外から刀剣の研磨依頼を受けており、その確かな技と経験は高く評価されている。

1本の刀を研ぐのに、約2週間をかけるが、最も重要なのは刀剣の姿形を整える「下地研ぎ」であり、完成時の出来栄を左右するという。また、刀文（焼入れによって現れる波模様）を美しく表現するため、薄く割った砥石^{といし}で、親指の腹を使って研磨するが、特に帽子（切先）には力を入れるという。長年の研磨作業により固くなった親指は、その卓越した技と経験を物語っている。

財団法人日本美術刀剣保存協会主催の刀剣研磨外装技術発表会で5度の入選を果たし、同協会和歌山県支部評議員を務めるなど、伝統技術の保存継承に果たされた功績は多大である。

父の川上敏夫氏（刀銘 南紀川上竜子清光^{なんきかわかみりゅうしきよみつ}）は、昭和51年度の和歌山県名匠表彰受賞者であり、その貴重な刀剣保存技術は脈々と受け継がれている。



職 種：刀研師^{かたなとぎし}

住 所：和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

生 年：昭和23年

平成 23 年度 和歌山県名匠

むら き ひろ やす 村 木 弘 育

◎ 業績及び経歴

18歳から表具師であった父村木康悦こうえつ氏のもとで修業を続け、父親の没後も家業の表具一筋に、常に『後世に残す』という信念のもと技能の研鑽に励む。その確かな技と経験が高く評価され、高野山における数多くの文化財の修復に格別の腕前を発揮している。

軸の表具には、表装の対象である「本紙」に合った裂地を取り合わせることはもとより、高野山という湿気が特に多い環境を考え、「本紙」の反りや曲りを防ぎ、四季の変化に十分耐えられるよう、仮貼りを長期間行った後、仕上げている。

襖の制作では、丈夫で長持ちすることと燃えにくいという利点から、上貼りに「間似合」という、泥を施した手漉きの紙を多く使い仕立替えを行っている。今日、「間似合紙」は大変高価なものになっているが、文化財の保護・保全を最優先に考え、古来から文化財などに用いられてきた素材にこだわり使用し続けている。また、肌裏には国指定重要無形文化財の薄美濃紙うすみのがみを使用し、下貼りには楮紙しゅしを使い、骨縛り、蓑貼り、蓑縛り、袋貼りを施すなど、脈々と受け継がれてきた匠の技を引き継いでいる。

金剛峯寺庫裡大広間襖の修復仕立直し、金剛峯寺伽藍内金堂十二天六曲屏風の仕立直し、奥の院山水屏風の仕立直し、遍照光院庫裡古画襖、床、壁面の修復仕立直しなど、日本の宝とも言える高野山の数多くの文化財の修復・保存に果たした功績は多大である。



職 種：表具師

住 所：和歌山県伊都郡高野町

生 年：昭和 18 年

平成 24 年度 和歌山県名匠

く ぼ ひろ よし はくざん
久 保 博 義 (号 博山)

◎ 業績及び経歴

和歌山県立和歌山工業高等学校で教鞭をとる傍ら 33 歳のときに、大阪府箕面市の能面師、摂津一観師のもとで修行を始める。師没後、能面文化協会代表となり、能面制作に励む一方、指導的役割も果たすようになる。

能面制作は、まず始めに檜角材を面型に型どり、輪郭や目、鼻、口等の概略を叩きノミで彫る「荒彫り」をする。次に正確に細かく彫り起こす「小作り」を経て、形を作っていく。その後、日本画に使用する胡粉を膠液で練った胡粉液を塗り、乾いたら表面を磨く。塗りと磨きを何度か繰り返し、滑らかになったら、胡粉液を「顔料」で着色したもので「上塗り」を行い、「毛書き」等を施す。最後に、自然な古い色調にするため、囲炉裏のあった古民家の天井付近から取り出した煤を煮詰めた液で古色を付ける。確かな技で制作された能面は高く評価され、能楽師の小林慶三師、松井彬師や金春欣三師により能舞台で使用されている。

紀州東照宮の春の例大祭（和歌祭）の「面掛行列（百面）」で長く使用され、破損が目立っていた古面の修復や、古面を保存するため、新面を奉納するとともに、「雑賀踊」の演者自身による「鬼面」制作の指導にも尽力している。また、国内及び海外での能面展示、講演を積極的に行っている。このように日本の伝統文化である能や能面の普及、文化財の修復・保存に果たしている功績は多大である。



職 種：能面師
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：昭和 15 年

平成 25 年度 和歌山県名匠

たに おか とし ふみ

谷 岡 敏 史

◎ 業績及び経歴

漆塗師の家系に生まれ、昭和 28 年、15 才の時に父のもとで、修行を始め、谷岡漆芸店の 4 代目として現在に至る。

紀州漆器は、約 400 年の歴史を持つ伝統工芸品であり、職人達が創意工夫を重ね、その技術を守り伝えてきた。氏は、紀州漆器の塗り部門において、59 年の長きにわたり、研鑽に励み、特に呂色塗りの技法に卓越した技術を有している。脈々と受け継がれてきた伝統技術を継承するとともに、自ら塗りの手法や道具を開発するなど、日々努力を重ねている。氏が開発した「瑞雲塗り」は、中塗りの段階で数種類の色漆を使用して塗り上げ、雲に見えるように研ぎ出すのが特徴である。

全国漆器展で日本経済新聞社長賞（昭和 56 年度）、和歌山県知事賞（昭和 58 年度、平成 10 年度）を受賞、平成 7 年度に伝統工芸士（一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会）に認定されている。

また、後進の指導育成をはじめ、見学の受け入れや体験教室を行う等、紀州漆器の普及・発展に努め、平成 16 年度に伝統的工芸品産業功労者等経済産業大臣表彰受賞、平成 19 年度に瑞宝単光章を受章。平成 23 年 5 月より紀州漆器伝統工芸士会会長として、伝統ある紀州漆器の振興に尽力し、その功績は多大である。



職 種：漆塗師うるしぬりし

住 所：和歌山県海南市

生 年：昭和 13 年

平成 26 年度 和歌山県名匠

うえ みち ます お
上 道 益 大

◎ 業績及び経歴

昭和 8 年新宮市に生まれる。

26 歳の時に、大工であった従兄弟に手ほどきを受け「御燈祭」に使用する松明を作り始め、現在に至るまで約 55 年間に渡りその製作に携わっている。

「御燈祭」は、毎年 2 月 6 日夜に行われる熊野速玉大社摂社神倉神社（新宮市）の例祭で、1800 年以上の歴史を有する火祭りである。この祭りは、白装束に荒縄を締め、御神火を遷した松明を持って、神倉山から急な石段を駆け下りるもので、県指定無形民俗文化財となっている。

氏は神倉山の麓に住み、1 年を通して松明を製作。木を乾燥させる工程に始まり完成までを一貫して自身の手で担っている。松明の柄の部分に「神倉神社」の焼き印があるのは、昔ながらの製法を守り続けている証である。平成 22 年 4 月には、新宮商工会議所青年部から地域振興育成奨励賞を受賞するなどその功績は地元でも広く認められている。

松明の製作に長年取り組み、「御燈祭」という本県の代表的祭事の伝統を支えており、その功績は多大である。



職 種：松明製作たいまつせいさく

住 所：和歌山県新宮市

生 年：昭和 8 年

平成 27 年度 和歌山県名匠

はし づめ やす お
橋 爪 靖 雄

◎ 業績及び経歴

昭和 10 年に海南市で生まれた氏は、同じ漆芸家であった父、義雄氏の影響を受け、23 歳の時に自分も漆芸家の道を歩むことを決意、上京して漆芸家・佐治賢使氏のもとで下地から蒔絵、螺鈿、平脱・平文などの伝統的な手法を学んだ。

昭和 37 年に帰郷し、漆工芸制作に入る。同年第 5 回日展に初入選し、以降入選を重ね、昭和 40 年には郷土漆工芸の発展を目指し、若手漆芸家による「グループ漆」の創設に貢献した。

氏の作品は、会得した伝統の技法を駆使し、洋画風の図柄を取り入れるなど、伝統を踏まえた上で進取を備えた漆工芸品として全国的にも評価が高く、昭和 59 年の第 16 回日展において工芸部門では県下初の特選を受賞。また、本県の文化振興に対する功績から、昭和 54 年度に和歌山県文化奨励賞、平成 12 年度には文化功労賞を受賞した。

「先人の誇る技術を一人でも多くの人に知ってもらいたい」と伝統の技と常に向き合い、数多くの傑作を生み出してきた。

代表作には、成田市・八富成田斎場エントランスホール、海南市保健福祉センターふれあいホール、アバローム紀の国エントランスホールなどの漆壁画がある。近年も、海南市浄國寺に「四季の草花と星座」をテーマにした蒔絵天井画を完成させるなど、創作活動はおとろえをみせることなく、真摯に制作に取り組む姿勢は、その作品にも表れており、長年にわたり、漆工芸の振興普及に尽力した功績は誠に多大である。



職 種：漆芸家

住 所：和歌山県海南市

生 年：昭和 10 年

平成 28 年度 和歌山県名匠

おく の まこと
奥 野 誠

◎ 業績及び経歴

武蔵野美術大学造形学部を卒業後、美術専門学校講師を務めながら美術造形作家として活動を始める。昭和 59 年に職を辞し、家族で大阪から旧龍神村に移り住み、芸術による村おこしを目的とする「龍神国際芸術村」の運営に携わる。その活動の中で、「山路紙」の存在を知り、紙漉きを始める。

日高川上流域は楮の産地であり、その楮を原料とする山路紙は、古くから龍神村で漉かれ、地域の主要な産物の一つであった。しかし、洋紙の普及とともに、戦後間もなく紙漉きの伝統は途絶えた。氏は、かつて紙漉きをしていた職人や村人に話を聞き、原料や道具、漉き方等について研究を重ね、素朴で力強さを特徴とする山路紙を復活させる。平成 21 年に開設された「田辺市龍神山路紙保存伝承施設」を運営し、原料の採取に始まる製作の全工程を昔ながらの手作業で行い、匠として技術の向上に努めている。

長年にわたり地元小学生に卒業証書作りを指導し、一般の人々を対象にした紙漉き体験教室を開くなど、和紙文化の伝承・普及に努めている。また、紙漉きだけでなく、原料の楮の特性を生かした様々な芸術作品を制作、展覧会で発表し、高い評価を得るなど山路紙の魅力を広く伝えている。平成 23 年には、全国税理士共栄会文化財団地域文化賞を受賞、「全国手漉き和紙青年の集い和歌山大会」を主催するなど、和紙文化の発展にも尽力しており、その功績は多大である。



職 種：紙漉き

住 所：和歌山県田辺市

生 年：昭和 28 年

平成 29 年度 和歌山県名匠

ふく がた たか お
福 形 崇 男

◎ 業績及び経歴

24歳の時から、同じく位牌職人であった父のもとで位牌製作の修行を積む。現在は福形大日堂ふくがただいにとどうの2代目として、手作業によって位牌の文字彫刻を行っている。

高野位牌は、高野町杖ヶ藪地区つえがやぶで江戸時代から作られ始めた。その後、高野山の職人たちによって技術は高められ、脈々と受け継がれた。高野山へお骨の一部を納骨する「骨のぼり」では、滞在中に戒名を彫り込む必要があるため、限られた時間で丁寧かつ正確に仕上げる熟練した彫刻を必要とする。

位牌づくりは分業で行われることが多く、木地、下地、塗りなどの各工程を、専門の職人が伝統の技術で仕上げていく。職人たちから受け取った位牌に戒名を彫り込む作業は、最後の仕上げとして大変重要である。近年では、どの位牌の産地においても、文字は機械で彫られる方法が主流となっており、手彫りで文字彫刻を行っている職人は全国でも希少な存在である。

氏は寺院から依頼される位牌も製作しており、特殊な形や大きさに合わせ、受け継いだ熟練の技で文字を彫り込んでいく。半世紀近くにわたり、卓越した技術で位牌彫刻に取り組む実直な姿勢は、職人そのものである。葬送儀礼、先祖供養の風習・文化を象徴する高野位牌に関わる技術を後世に引き継ぐ重要な役割を担っており、その功績は多大である。



職 種：位牌文字彫刻
住 所：和歌山県伊都郡高野町
生 年：昭和 23 年

平成 30 年度 和歌山県名匠

まつ もと はま じ
松 本 濱 次

◎ 業績及び経歴

18歳の頃、父の勧めで同郷の桶職人のもとに弟子入りし修行を積む。親方の下で技術に磨きをかけ精力的に仕事に打ち込んでいたが、昭和40年代のプラスチック製品の台頭により仕事が減少したため、桶製作から離れ木材会社で製材業に携わる。定年退職後、故郷に戻り近所の人に桶の修理を頼まれたことをきっかけに製作を再開した。厳しい修行の中で身につけた技術は20年余りのブランクをものともせず、以来日々製作に励んでいる。

氏は材料に熊野地方で切り出されたスギを用いるこだわりを持ち、修行当時に揃えた道具を使って、全て手作業で製品を完成させる。桶の周囲の一枚一枚の板を「樽くれば」といい、「くれなた」で割り刃物で荒削りをする。「正直しょうじき」という独特の鉋で、側板同士が接する面を削るが、この正確さが桶の性能を左右するため、角度を合わせることを特に気をつけている。その後、「かいかた」という定規にあわせて、正確な円を作る。最後に自ら細かく加工した竹を「箍たが」として軽やかな手さばきで巻き付け、槌で根気よく仕上げている。

数ミリ単位で木を削る氏の製品には、手づくりならではのあたたかさ、木ならではの風格がにじみ出ている。桶だけでなくお櫃や漬物樽など幅広く手掛けているが、その根底にはこれらの生活用品が育んできた和食文化を後世に受け継いでいきたいという強い思いが込められている。製作に対する真摯な姿勢と心意気が県内外からの信頼を得ており、卓越した技術で暮らしの中に息づく文化を支える功績は多大である。



職 種：桶製作おけせいさく
住 所：和歌山県田辺市
生 年：昭和9年

令和元年度 和歌山県名匠

しがけいじ 志賀啓二

◎ 業績及び経歴

18歳からシガ木工の6代目として、父のもとで修行を積んで以来52年間、紀州桐箆笥の製作に専念してきた。紀州桐箆笥は、江戸時代末期には現在の和歌山市において製造技術が確立したと考えられており、明治時代には、大阪圏の需要を満たす地廻り産地として発展を続け、南海鉄道の開通により貨物輸送が可能になったことを機に、製作が一層盛んになり技術面でも発展を遂げた。

箆笥の製作には、自然乾燥、木取り、矧ぎ加工、本体加工、組み立て、仕上げなどの工程があるが、氏はほぼ全工程を手仕事で仕上げられる数少ない職人のひとりである。現在は主に仕上げ加工を専門とし、平成20年に塗装部門で伝統工芸士の認定を受ける。

白い木肌を際立たせる「砥の粉仕上げ」に対し、木目を模様として浮き上がらせる「焼き桐仕上げ」を考案。また、「砥の粉」に色彩を施すことで現代的な彩色の桐箆笥に仕上げる技法を県工業技術センターとともに開発するなど、優れた技術を継承する中で、次代にも続く紀州桐箆笥の製作に励んでいる。

また、氏は平成11年に代表取締役役に就任すると、後進の指導にも力を注ぎ、社内で7名の伝統工芸士を育成した。

さらに、和歌山県家具工業協同組合では、設立時より理事を務め、紀州桐箆笥協同組合では、国の伝統的工芸品（「伝統的工芸品産業振興法」に基づく。）の指定に中心的役割を果たした。平成24年には、和歌山県で初めて開催された「第32回全国伝統工芸士和歌山大会」において大会副委員長に就き大会を成功に導いた。このように技術者としてだけでなく、業界の発展にも寄与しており、その功績は多大である。



職 種：紀州桐箆笥製作
住 所：和歌山県和歌山市
生 年：昭和24年

令和2年度 和歌山県名匠

やま うえ ひろ やす

山上寛恭 (竿銘 こま鳥)

どり

◎ 業績及び経歴

高校卒業と同時に、名人といわれた父 山上高司氏に入門し、竿師としての道を歩み始めた。その年の末に父が亡くなったため、叔父 山上文雄氏のもとで修業を積み、23歳で独立。父の竿銘 こま鳥 を2代目として引き継ぎ現在に至る。

紀州へら竿は、100年以上の歴史を持つ国の伝統的工芸品であり、職人たちは意匠を凝らしながらその伝統的な製作技術を受け継いできた。

へら竿の製作には、竹伐り、生地組み、荒火入れ、糸巻き、漆塗り、穂先削りなど、細かく分けると130もの作業工程があるが、氏はその全工程を約1年かけてひとり手がける。しかも、ほぼ全ての工程を手作業で仕上げるため、繊細で卓越した技術と経験が要求される。

氏のへら竿は、伝統の技に工芸品の手法も取り入れられており、竿の握り部分に卵殻を施すなどデザイン性や芸術性も兼ね備えている。また、見た目だけでなく釣り人のニーズに合うよう釣り道具としての機能美にもこだわり、1本1本丁寧に作られた竿は「一生もの」と絶賛されている。

平成28年に和歌山県技能賞を受賞し、平成30年にはその高度な伝統的技法等の習得が認められ、伝統工芸士に認定された。その後も、伝統的工芸品産業功労者等経済産業大臣表彰（令和元年）を受賞した。

また、氏は平成20年から2年間、紀州製竿組合組合長を務め、各地での展示会や全国ヘラブナ釣り選手権大会を開催する等、へら竿の普及啓発に尽力した。さらに、若手にも惜しみなくその技術を伝え、熱心な指導に取り組む等後継者育成に励んでいる。

このように、熟練の技を持った技術者としてだけでなく紀州へら竿の伝統的な製作技術を後世に引き継ぐ重要な役割を担っており、その功績は多大である。



職 種：製竿師^{せいかんし}

住 所：和歌山県橋本市

生 年：昭和27年

令和3年度 和歌山県名匠

はら ゆき お
原 幸 男

◎ 業績及び経歴

昭和13年、南部川村（現：みなべ町清川）に生まれる。中学校卒業と同時に父の炭焼きを2代目として継いで以来67年間、木炭の最高傑作と評される紀州備長炭の製作に励んでいる。

紀州備長炭という名称は、江戸時代に田辺藩で炭問屋を営んでいた備中屋長左衛門が「備長炭」と名付けて江戸に卸した事に由来するといわれ、その優れた製炭技術は昭和49年に県の無形民俗文化財に指定されている。

現在、製炭に使用する窯は40俵程の大型のものが主流となっているが、氏は25俵前後の小型の窯を使用することで、「はね木」や「ほうり木」といった伝統的な手法を用いて炭を焼く。製炭作業の中でも、窯の小さな穴から立ち昇る煙の色と匂いで炭化具合を見極めるのは熟練の技である。

平成元年には林産業振興功労者表彰（南部川村）、平成22年には特用林産功労者表彰（日本特用林産振興会）を受賞。また、原木林の木をすべて切る皆伐ではなく、太い幹から選択して切る「択伐」という技術で原木を切り出す実績が認められ、平成27年に公益社団法人国土緑化推進機構「森の名手・名人」森づくり部門で択伐技術の名人に認定された。択伐は和歌山県の製炭者独自の技術で、原木林の林況を見極め、樹種や樹齢等に応じ伐採率や残存木の太さ等を判断して作業する必要がある、高度な知見と技術、経験が必要とされる。

さらに、「やまづくり塾」の活動を生き字引的な立場から支えており、若い製炭者をはじめ、製炭業に従事する人々に山づくりの重要性を伝え、択伐の復活とその技術の継承に精力的に取り組まれている。その根底には「炭づくりは山づくり」という強い思いが込められており、卓越した製炭技術は言うまでもなく、紀州の山を守りながら製炭に励む功績は多大である。



職 種：紀州備長炭製炭士
住 所：和歌山県日高郡みなべ町
生 年：昭和13年

令和4年度 和歌山県名匠

ほり いけ まさ お
堀池雅夫

◎ 業績及び経歴

昭和26年、静岡県に生まれる。35歳の時に田辺市に移住し、妻の実家の製煤業を継ぐ。当初は油煙煤を製造していたが、知人から懇願され、松煙墨製作を始める。

松煙墨は、松の煤（松煙）と膠を合わせて作る墨であり、奈良時代には日本で製作されていた。特に紀州松煙墨は、平安時代、熊野詣に訪れた上皇に献上された名墨である。その素材となる松煙の製煤は、山村の貴重な現金収入であり、かつて紀州の山々には多くの「煙屋」がいたが、昭和30年代になり、製煤業の過酷さや松材の減少、コストの安い鉋油墨の普及により、紀州松煙墨は断絶した。その松煙墨製作を復活させたのが堀池氏である。

古来から松煙は、障子で囲った小部屋に焚窯を設置し、松材を燃やして障子に煤を付着させて採取してきた。氏は障子の代わりに金網を用いつつ、他はすべて自身の調査により復元した伝統的な製煤方法を踏襲し製作する。小さな炎で2週間をかけて500kgの松材を燃やして採れる煤はわずか10kgであり、膠と練り合わせて型に入れ、灰の中で乾燥させて墨に仕上げるまで半年以上を要する。製煤から松煙墨の製造までの工程を一貫して行う職人は全国で氏ただ一人である。氏の松煙墨は、独特のにじみと黒の色彩が高く評価され、平成27年には岐阜県から清流の国・森の恵み大賞優秀賞を受賞した。

さらに氏は、煤に種々の顔料を加えて膠に練り込み、鮮やかな色を付けた墨を創案した。氏が「彩煙墨」と名付けたその墨は、淡く繊細な色彩で多くの人々に愛用されている。

紀州松煙墨製作の復活は言うまでもなく、彩煙墨の創案などを通して、和歌山が誇る紀州松煙墨を未来に残そうと奮闘する功績は多大である。



職 種：紀州松煙墨製作
住 所：和歌山県田辺市
生 年：昭和26年

令和5年度 和歌山県名匠

いけ だ ひで たか しゅうほう
池 田 秀 孝 (号 秀峯)

◎ 業績及び経歴

昭和21年、橋本市に生まれる。組子細工師である父・池田清吉氏の影響で、幼少期から組子細工に触れて育つ。二十歳過ぎの頃アルミサッシに組子を施すという依頼を契機に、本格的に父の後を継ぎ、組子細工の製作を始める。

紀州高野組子細工とは、「高野六木」を材料として、釘や金具等を一切用いず、手作業で三本の薄い木材を正三角形に組み合わせた「三ツ組手」により幾何学紋様を組み上げる伝統的な装飾技法であり、衝立・欄間・額・置物等を美しく装飾する。

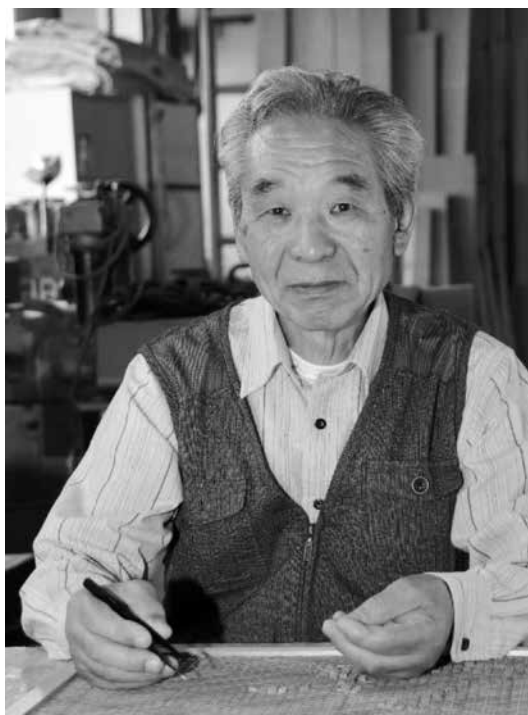
氏は、こうした「三ツ組手」の伝統技法を発展させ三ツ組手の中に材質・濃淡が異なる木片を組み付けることで、紋様だけではなく、人や風景など複雑な絵柄を描き出す「きのくに・千切れはめ込め技法」を独自に編み出した。

本技法の独自性と芸術性は高く評価され、総本山金剛峯寺より高野山伝統技術に承認されている。

また、氏は橋本市の小中学校で組子細工を用いた木工教室や卒業記念制作の指導、橋本市少年少女発明クラブの指導員として次世代の人材育成活動に尽力しており、誰もが愉しめる紀州高野組子細工の普及に取り組んでいる。

さらに本来、使用に熟練した技術を要する機具について、氏が独自に考案した補助器具を併用することで、経験がなくても組子細工が製作できるよう改良するなど、裾野の広い技術者養成にも取り組んでいる。

紀州高野組子細工師としての熟練の技による作品の製作だけでなく、紀州高野組子細工の発展・継承に大きな役割を果たしており、その功績は多大である。



職 種：紀州高野組子細工製作

住 所：和歌山県橋本市

生 年：昭和21年

主な表彰歴等

平成10年 和歌山県知事技能賞

平成13年 橋本市文化奨励賞

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（年度別）

年度	氏名	職種	在住市町村	生年	掲載ページ
昭和49年度	河合 藤一郎 (改名 篤亮)	蒔絵師	海南市	明治36年	1
	杓 真藏 (旧姓：佐藤)	宮大工	田辺市	明治34年	2
	山田 岩義 (竿銘：源竿師)	製竿師	橋本市	大正元年	3
昭和50年度	宮嶋 正太郎	らんまづくり	和歌山市	明治29年	4
	山本 幸太郎	獅子頭づくり	御坊市	明治36年	5
	若林 常太良 (号：常盤)	灯ろうづくり	貴志川町 (現：紀の川市)	明治16年	6
昭和51年度	片桐 順之助	番傘づくり	海南市	明治30年	7
	川上 敏夫 (刀銘：南紀川上竜子清光)	刀匠	那智勝浦町	大正2年	8
	田中 正助	人形づくり	御坊市	明治40年	9
昭和52年度	辻本 喜次	宮大工	高野町	大正2年	10
	土井 定太郎	檜皮葺師	橋本市	明治32年	11
昭和53年度	芝 安雄 (本名：芝 安男)	民芸品製作	本宮町 (現：田辺市)	大正10年	12
	新田 隆造 (本名：新田 和夫)	唐木指物師	有田市	明治44年	13
	日野 常	表具師	那智勝浦町	明治26年	14
昭和54年度	雑賀 彰	らんま製作	和歌山市	明治41年	15
	田邊 正義	漆塗師	海南市	明治44年	16
	谷上 伊三郎	檜皮葺・柿葺師	橋本市	明治30年	17
昭和55年度	岡田 虎次郎	漆器木地師	海南市	明治34年	18
	三井 智文	宮大工	岩出町 (現：岩出市)	大正4年	19
	藪田 善一	花火師	吉備町 (現：有田川町)	明治44年	20
昭和56年度	石井 義夫 (竿銘：げてさく)	製竿師	高野口町 (現：橋本市)	大正3年	21
	鮎田 武彦 (通称・鮎田 和道)	指物師	新宮市	大正2年	22
昭和57年度	荒川 武夫	書院建具師	和歌山市	明治45年	23
	新堀 武夫	表具師	かつらぎ町	明治45年	24
	山口 貞次郎 (号：光峯)	那智黒硯製作	那智勝浦町	明治31年	25
昭和58年	安達 貞楠 (刀銘：龍神太郎源貞行)	刀匠	龍神村 (現：田辺市)	明治42年	26
	伊東 昌造	漆下地師	海南市	明治35年	27
	濱野 榮二郎 (号：等等人)	蒔絵師	海南市	明治34年	28
昭和59年	中坊 君子	高野紙製作	九度山町	明治40年	29

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（年度別）

年度	氏名	職種	在住市町村	生年	掲載ページ
昭度和59年	御前 隆	三味線製作	和歌山市	明治41年	30
昭和60年度	岩本 正幸	川船設計製作	新宮市	大正12年	31
	大川 啓	鍛冶職	新宮市	明治43年	32
昭和61年度	堀 庄次郎	檜皮葺師	橋本市	大正元年	33
昭和62年度	大谷 善兵衛	鋳匠	橋本市	大正10年	34
	津本 晴の	保田紙手漉	清水町 (現：有田川町)	明治40年	35
昭和63年度	小関 伊佐美	沈金師	海南市	大正12年	36
	山本 軍治	表具師	田辺市	大正10年	37
平成元年度	山上 文雄（竿銘：山彦）	製竿師	橋本市	大正10年	38
平成2年	上中 喜代司	桐箆筒製作	和歌山市	昭和8年	39
	武内 文吉	鍛冶職	御坊市	大正3年	40
平成3年度	尾上 徳治	宮大工	高野町	昭和5年	41
	和田 年晴	漆塗師	海南市	昭和3年	42
平成4年度	岡田 昇	漆器木地師	海南市	昭和2年	43
平成5年度	玉置 茂市	桶製作	粉河町 (現：紀の川市)	明治45年	44
	勝股 文夫	紀州備長炭製作	南部川村 (現：みなべ町)	昭和6年	45
平成6年度	狩谷 英孝	船大工	美浜町	昭和8年	46
	橋本 恵一	表具師	田辺市	昭和7年	47
平成7年度	古田 龍雄	大松流有田かご製作	中津村 (現：日高川町)	明治37年	48
	長谷川 時和	木製家具製造	海南市	大正13年	49
平成8年	玉置 フミ	人形づくり	和歌山市	大正9年	50
	出口 譲爾	加飾（蒔絵）	海南市	昭和9年	51
平成9年度	新家 虎雄	木工品制作	高野町	大正10年	52
平成10年度	田阪 一郎	反射望遠鏡レンズ製作	新宮市	昭和4年	53
	山口 伊左夫（号：光峯）	那智黒硯製作	那智勝浦町	昭和19年	54
平成11年度	新田 義雄（号：紀雲）	唐木指物師	有田市	昭和19年	55
平成12年度	岡田 義正	紀州桐箆筒製作	貴志川町 (現：紀の川市)	昭和8年	56
	松之平 義治（号：松芳）	紀州漆器木地師	和歌山市	昭和3年	57
平成13年度	城 純一（竿銘：魚集）	製竿師	橋本市	大正14年	58

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（年度別）

年度	氏名	職種	在住市町村	生年	掲載ページ
平成 14 年度	玉井 又次	紀州備長炭製炭士	日置川町 (現：白浜町)	大正 15 年	59
	仲 完	船大工	那智勝浦町	大正 15 年	60
平成 15 年度	東 浩美	建具工 (文化財保存修理)	和歌山市	昭和 19 年	61
	久世 清吾	漆器沈金師	海南市	昭和 12 年	62
平成 16 年度	大川 治	鍛冶職	新宮市	昭和 11 年	63
	野田 信男	松明・扇神輿製作	那智勝浦町	昭和 23 年	64
平成 17 年度	羽山 直幸	表具師	由良町	昭和 6 年	65
	藪田 善助	花火師	吉備町 (現：有田川町)	昭和 17 年	66
平成 18 年度	上村 誠	製茶（手もみ茶）	白浜町	昭和 24 年	67
	津田 満雄 (竿銘：至峰)	製竿師	九度山町	昭和 4 年	68
平成 19 年度	桑添 勇雄	棕櫚箒製作	紀美野町	昭和 3 年	69
	三塚 明	伝統建築保存修理	紀の川市	昭和 22 年	70
平成 20 年度	谷上 永晃	文化財修理屋根葺士 (檜皮葺・柿葺)	橋本市	昭和 22 年	71
	西畑 猛	紀州桐箒箒製作	和歌山市	昭和 14 年	72
平成 21 年度	栗林 つね代	手漉き和紙「保田紙」 製作	有田川町	大正 14 年	73
平成 22 年度	川上 安一	刀研師	那智勝浦町	昭和 23 年	74
平成 23 年度	村木 弘育	表具師	高野町	昭和 18 年	75
平成 24 年度	久保 博義（号：博山）	能面師	和歌山市	昭和 15 年	76
平成 25 年度	谷岡 敏史	漆塗師	海南市	昭和 13 年	77
平成 26 年度	上道 益大	松明製作	新宮市	昭和 8 年	78
平成 27 年度	橋爪 靖雄	漆芸家	海南市	昭和 10 年	79
平成 28 年度	奥野 誠	紙漉き	田辺市	昭和 28 年	80
平成 29 年度	福形 崇男	位牌文字彫刻	高野町	昭和 23 年	81
平成 30 年度	松本 濱次	桶製作	田辺市	昭和 9 年	82
令和元年度	志賀 啓二	紀州桐箒箒製作	和歌山市	昭和 24 年	83
令和 2 年度	山上 寛恭 (竿銘：こま鳥)	製竿師	橋本市	昭和 27 年	84
令和 3 年度	原 幸男	紀州備長炭製炭士	みなべ町	昭和 13 年	85
令和 4 年度	堀池 雅夫	紀州松煙墨製作	田辺市	昭和 26 年	86
令和 5 年度	池田 秀孝 (号：秀峯)	紀州高野組子細工製作	橋本市	昭和 21 年	87

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（地域別）

地域	受賞時住所	受賞年度	氏名	職種	生年	掲載ページ
和歌山市	和歌山市	昭和 50 年度	宮嶋 正太郎	らんまづくり	明治 29 年	4
	和歌山市	昭和 54 年度	雑賀 彰	らんま製作	明治 41 年	15
	和歌山市	昭和 57 年度	荒川 武夫	書院建具師	明治 45 年	23
	和歌山市	昭和 59 年度	御前 隆	三味線製作	明治 41 年	30
	和歌山市	平成 2 年度	上中 喜代司	桐箏箏製作	昭和 8 年	39
	和歌山市	平成 8 年度	玉置 フミ	人形づくり	大正 9 年	50
	和歌山市	平成 12 年度	松之平 義治 (号：松芳)	紀州漆器木地師	昭和 3 年	57
	和歌山市	平成 15 年度	東 浩美	建具工 (文化財保存修理)	昭和 19 年	61
	和歌山市	平成 20 年度	西畑 猛	紀州桐箏箏製作	昭和 14 年	72
	和歌山市	平成 24 年度	久保 博義 (号：博山)	能面師	昭和 15 年	76
	和歌山市	令和元年度	志賀 啓二	紀州桐箏箏製作	昭和 24 年	83
岩出市	岩出町 (現：岩出市)	昭和 55 年度	三井 智文	宮大工	大正 4 年	19
紀の川市	貴志川町 (現：紀の川市)	昭和 50 年度	若林 常太良 (号：常盤)	灯ろうづくり	明治 16 年	6
	粉河町 (現：紀の川市)	平成 5 年度	玉置 茂市	桶製作	明治 45 年	44
	貴志川町 (現：紀の川市)	平成 12 年度	岡田 義正	紀州桐箏箏製作	昭和 8 年	56
	紀の川市	平成 19 年度	三塚 明	伝統建築保存修理	昭和 22 年	70
橋本市	橋本市	昭和 49 年度	山田 岩義 (竿銘：源竿師)	製竿師	大正元年	3
	橋本市	昭和 52 年度	土井 定太郎	檜皮葺師	明治 32 年	11
	橋本市	昭和 54 年度	谷上 伊三郎	檜皮葺・柿葺師	明治 30 年	17
	高野口町 (現：橋本市)	昭和 56 年度	石井 義夫 (竿銘：げてさく)	製竿師	大正 3 年	21
	橋本市	昭和 61 年度	堀 庄次郎	檜皮葺師	大正元年	33
	橋本市	昭和 62 年度	大谷 善兵衛	鋳匠	大正 10 年	34
	橋本市	平成元年度	山上 文雄 (竿銘：山彦)	製竿師	大正 10 年	38
	橋本市	平成 13 年度	城 純一 (竿銘：魚集)	製竿師	大正 14 年	58
	橋本市	平成 20 年度	谷上 永晃	文化財修理屋根葺士 (檜皮葺・柿葺)	昭和 22 年	71
	橋本市	令和 2 年度	山上 寛恭 (竿銘：こま鳥)	製竿師	昭和 27 年	84
	橋本市	令和 5 年度	池田 秀孝 (号：秀峰)	紀州高野組子細工製作	昭和 21 年	87
海南市	海南市	昭和 49 年度	河合 藤一郎 (改名：篤亮)	蒔絵師	明治 36 年	1
	海南市	昭和 51 年度	片桐 順之助	番傘づくり	明治 30 年	7

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（地域別）

地域	受賞時住所	受賞年度	氏名	職種	生年	掲載ページ
海南市	海南市	昭和 54 年度	田邊 正義	漆塗師	明治 44 年	16
	海南市	昭和 55 年度	岡田 虎次郎	漆器木地師	明治 34 年	18
	海南市	昭和 58 年度	伊東 昌造	漆下地師	明治 35 年	27
	海南市	昭和 58 年度	濱野 榮二郎 (号：等等人)	蒔絵師	明治 34 年	28
	海南市	昭和 63 年度	小関 伊佐美	沈金師	大正 12 年	36
	海南市	平成 3 年度	和田 年晴	漆塗師	昭和 3 年	42
	海南市	平成 4 年度	岡田 昇	漆器木地師	昭和 2 年	43
	海南市	平成 7 年度	長谷川 時和	木製家具製造	大正 13 年	49
	海南市	平成 8 年度	出口 譲爾	加飾（蒔絵）	昭和 9 年	51
	海南市	平成 15 年度	久世 清吾	漆器沈金師	昭和 12 年	62
	海南市	平成 25 年度	谷岡 敏史	漆塗師	昭和 13 年	77
	海南市	平成 27 年度	橋爪 靖雄	漆芸家	昭和 10 年	79
有田市	有田市	昭和 53 年度	新田 隆造 (本名：新田 和夫)	唐木指物師	明治 44 年	13
	有田市	平成 11 年度	新田 義雄 (号：紀雲)	唐木指物師	昭和 19 年	55
御坊市	御坊市	昭和 50 年度	山本 幸太郎	獅子頭づくり	明治 36 年	5
	御坊市	昭和 51 年度	田中 正助	人形づくり	明治 40 年	9
	御坊市	平成 2 年度	武内 文吉	鍛冶職	大正 3 年	40
田辺市	田辺市	昭和 49 年度	柰 真藏 (旧姓：佐藤)	宮大工	明治 34 年	2
	本宮町 (現：田辺市)	昭和 53 年度	芝 安雄 (本名：芝 安男)	民芸品製作	大正 10 年	12
	龍神村 (現：田辺市)	昭和 58 年度	安達 貞楠 (刀銘：龍神太郎源貞行)	刀匠	明治 42 年	26
	田辺市	昭和 63 年度	山本 軍治	表具師	大正 10 年	37
	田辺市	平成 6 年度	橋本 恵一	表具師	昭和 7 年	47
	田辺市	平成 28 年度	奥野 誠	紙漉き	昭和 28 年	80
	田辺市	平成 30 年度	松本 濱次	桶製作	昭和 9 年	82
	田辺市	令和 4 年度	堀池 雅夫	紀州松煙墨製作	昭和 26 年	86
新宮市	新宮市	昭和 56 年度	鮎田 武彦 (通称：鮎田 和道)	指物師	大正 2 年	22
	新宮市	昭和 60 年度	岩本 正幸	川船設計製作	大正 12 年	31
	新宮市	昭和 60 年度	大川 啓	鍛冶職	明治 43 年	32
	新宮市	平成 10 年度	田阪 一郎	反射望遠鏡レンズ製作	昭和 4 年	53

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（地域別）

地域	受賞時住所	受賞年度	氏名	職種	生年	掲載ページ
新宮市	新宮市	平成 16 年度	大川 治	鍛冶職	昭和 11 年	63
	新宮市	平成 26 年度	上道 益大	松明製作	昭和 8 年	78
海草郡	紀美野町	平成 19 年度	桑添 勇雄	棕櫚箒製作	昭和 3 年	69
伊都郡	かつらぎ町	昭和 57 年度	新堀 武夫	表具師	明治 45 年	24
	九度山町	昭和 59 年度	中坊 君子	高野紙製作	明治 40 年	29
	九度山町	平成 18 年度	津田 満雄 (竿銘:至峰)	製竿師	昭和 4 年	68
	高野町	昭和 52 年度	辻本 喜次	宮大工	大正 2 年	10
	高野町	平成 3 年度	尾上 徳治	宮大工	昭和 5 年	41
	高野町	平成 9 年度	新家 虎雄	木工品制作	大正 10 年	52
	高野町	平成 23 年度	村木 弘育	表具師	昭和 18 年	75
	高野町	平成 29 年度	福形 崇男	位牌文字彫刻	昭和 23 年	81
有田郡	吉備町 (現:有田川町)	昭和 55 年度	藪田 善一	花火師	明治 44 年	20
	清水町 (現:有田川町)	昭和 62 年度	津本 晴の	保田紙手漉	明治 40 年	35
	吉備町 (現:有田川町)	平成 17 年度	藪田 善助	花火師	昭和 17 年	66
	有田川町	平成 21 年度	栗林 つね代	手漉き和紙 「保田紙」製作	大正 14 年	73
日高郡	南部川村 (現:みなべ町)	平成 5 年度	勝股 文夫	紀州備長炭製作	昭和 6 年	45
	美浜町	平成 6 年度	狩谷 英孝	船大工	昭和 8 年	46
	中津村 (現:日高川町)	平成 7 年度	古田 龍雄	大松流有田かご製作	明治 37 年	48
	由良町	平成 17 年度	羽山 直幸	表具師	昭和 6 年	65
	みなべ町	令和 3 年度	原 幸男	紀州備長炭製炭士	昭和 13 年	85
西牟婁郡	日置川町 (現:白浜町)	平成 14 年度	玉井 又次	紀州備長炭製炭士	大正 15 年	59
	白浜町	平成 18 年度	上村 誠	製茶(手もみ茶)	昭和 24 年	67
東牟婁郡	那智勝浦町	昭和 51 年度	川上 敏夫 (刀銘:南紀川上竜子清光)	刀匠	大正 2 年	8
	那智勝浦町	昭和 53 年度	日野 常	表具師	明治 26 年	14
	那智勝浦町	昭和 57 年度	山口 貞次郎 (号:光峯)	那智黒硯製作	明治 31 年	25
	那智勝浦町	平成 10 年度	山口 伊左夫 (号:光峯)	那智黒硯製作	昭和 19 年	54
	那智勝浦町	平成 14 年度	仲 完	船大工	大正 15 年	60
	那智勝浦町	平成 16 年度	野田 信男	松明・扇神輿製作	昭和 23 年	64
	那智勝浦町	平成 22 年度	川上 安一	刀研師	昭和 23 年	74

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表(職種・分野別)

分野	職種	受賞年度	氏名	受賞時住所	生年	掲載ページ	
漆器	蒔絵師	昭和 49 年度	河合 藤一郎 (改名 篤亮)	海南市	明治 36 年	8	
	漆塗師	昭和 54 年度	田邊 正義	海南市	明治 44 年	16	
	漆器木地師	昭和 55 年度	岡田 虎次郎	海南市	明治 34 年	18	
	漆下地師	昭和 58 年度	伊東 昌造	海南市	明治 35 年	27	
	蒔絵師	昭和 58 年度	濱野 榮二郎 (号 等等人)	海南市	明治 34 年	28	
	沈金師	昭和 63 年度	小関 伊佐美	海南市	大正 12 年	36	
	漆塗師	平成 3 年度	和田 年晴	海南市	昭和 3 年	42	
	漆器木地師	平成 4 年度	岡田 昇	海南市	昭和 2 年	43	
	加飾(蒔絵)	平成 8 年度	出口 譲爾	海南市	昭和 9 年	51	
	紀州漆器木地師	平成 12 年度	松之平 義治 (号 松芳)	和歌山市	昭和 3 年	57	
	漆器沈金師	平成 15 年度	久世 清吾	海南市	昭和 12 年	62	
	漆塗師	平成 25 年度	谷岡 敏史	海南市	昭和 13 年	77	
	漆芸家	平成 27 年度	橋爪 靖雄	海南市	昭和 10 年	79	
木材・木製品・紙加工品	紀州へら竿	製竿師	昭和 49 年度	山田 岩義 (竿銘 源竿師)	橋本市	大正元年	3
		製竿師	昭和 56 年度	石井 義夫 (竿銘 げてさく)	高野口町 (現：橋本市)	大正 3 年	21
		製竿師	平成元年度	山上 文雄 (竿銘 山彦)	橋本市	大正 10 年	38
		製竿師	平成 13 年度	城 純一 (竿銘 魚集)	橋本市	大正 14 年	58
		製竿師	平成 18 年度	津田 満雄 (竿銘 至峰)	九度山町	昭和 4 年	68
		製竿師	令和 2 年度	山上 寛恭 (竿銘 こま鳥)	橋本市	昭和 27 年	84
	芸能	獅子頭づくり	昭和 50 年度	山本 幸太郎	御坊市	明治 36 年	5
		三味線製作	昭和 59 年度	御前 隆	和歌山市	明治 41 年	30
		能面師	平成 24 年度	久保 博義 (号 博山)	和歌山市	昭和 15 年	76
	生活用具	番傘づくり	昭和 51 年度	片桐 順之助	海南市	明治 30 年	7
		民芸品製作	昭和 53 年度	芝 安雄 (本名 芝 安男)	本宮町 (現：田辺市)	大正 10 年	12
		桶製作	平成 5 年度	玉置 茂市	粉河町 (現：紀の川市)	明治 45 年	44
大松流有田かご製作		平成 7 年度	古田 龍雄	中津村 (現：日高川町)	明治 37 年	48	
木製家具製造		平成 7 年度	長谷川 時和	海南市	大正 13 年	49	
木工品制作		平成 9 年度	新家 虎雄	高野町	大正 10 年	52	
棕櫚箒製作		平成 19 年度	桑添 勇雄	紀美野町	昭和 3 年	69	
桶製作	平成 30 年度	松本 濱次	田辺市	昭和 9 年	82		

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表(職種・分野別)

分野	職種	受賞年度	氏名	受賞時住所	生年	掲載ページ	
木材・木製品・紙加工品	人形	人形づくり	昭和 51 年度	田中 正助	御坊市	明治 40 年	9
		人形づくり	平成 8 年度	玉置 フミ	和歌山市	大正 9 年	50
	指物	唐木指物師	昭和 53 年度	新田 隆造 (本名 新田 和夫)	有田市	明治 44 年	13
		指物師	昭和 56 年度	鮎田 武彦 (本名 鮎田 和道)	新宮市	大正 2 年	22
		唐木指物師	平成 11 年度	新田 義雄 (号 紀雲)	有田市	昭和 19 年	55
	表具	表具師	昭和 53 年度	日野 常	那智勝浦町	明治 26 年	14
		表具師	昭和 57 年度	新堀 武夫	かつらぎ町	明治 45 年	24
		表具師	昭和 63 年度	山本 軍治	田辺市	大正 10 年	37
		表具師	平成 6 年度	橋本 恵一	田辺市	昭和 7 年	47
		表具師	平成 17 年度	羽山 直幸	由良町	昭和 6 年	65
		表具師	平成 23 年度	村木 弘育	高野町	昭和 18 年	75
	和紙	高野紙製作	昭和 59 年度	中坊 君子	九度山町	明治 40 年	29
		保田紙手漉	昭和 62 年度	津本 晴の	清水町 (現:有田川町)	明治 40 年	35
		手漉き和紙 「保田紙」製作	平成 21 年度	栗林 つね代	有田川町	大正 14 年	73
		紙漉き	平成 28 年度	奥野 誠	田辺市	昭和 28 年	80
	船	川船設計製作	昭和 60 年度	岩本 正幸	新宮市	大正 12 年	31
		船大工	平成 6 年度	狩谷 英孝	美浜町	昭和 8 年	46
		船大工	平成 14 年度	仲 完	那智勝浦町	大正 15 年	60
	紀州桐箆笥	桐箆笥製作	平成 2 年度	上中 喜代司	和歌山市	昭和 8 年	39
		紀州桐箆笥製作	平成 12 年度	岡田 義正	貴志川町 (現:紀の川市)	昭和 8 年	56
紀州桐箆笥製作		平成 20 年度	西畑 猛	和歌山市	昭和 14 年	72	
紀州桐箆笥製作		令和元年度	志賀 啓二	和歌山市	昭和 24 年	83	
備長炭	紀州備長炭製作	平成 5 年度	勝股 文夫	南部川村 (現:みなべ町)	昭和 6 年	45	
	紀州備長炭製炭士	平成 14 年度	玉井 又次	日置川町 (現:白浜町)	大正 15 年	59	
	紀州備長炭製炭士	令和 3 年度	原 幸男	みなべ町	昭和 13 年	85	
神仏事用具	松明・扇神輿製作	平成 16 年度	野田 信男	那智勝浦町	昭和 23 年	64	
	松明製作	平成 26 年度	上道 益大	新宮市	昭和 8 年	78	
	位牌文字彫刻	平成 29 年度	福形 崇男	高野町	昭和 23 年	81	
紀州高野組子細工	紀州高野組子細工製作	令和 5 年度	池田 秀孝	橋本市	昭和 21 年	87	

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表(職種・分野別)

分野		職種	受賞年度	氏名	受賞時住所	生年	掲載ページ
建築	宮大工	宮大工	昭和 49 年度	本 真藏 (旧姓 佐藤)	田辺市	明治 34 年	2
		宮大工	昭和 52 年度	辻本 喜次	高野町	大正 2 年	10
		宮大工	昭和 55 年度	三井 智文	岩出町 (現：岩出市)	大正 4 年	19
		宮大工	平成 3 年度	尾上 徳治	高野町	昭和 5 年	41
	らんま	らんまづくり	昭和 50 年度	宮嶋 正太郎	和歌山市	明治 29 年	4
		らんま製作	昭和 54 年度	雑賀 彰	和歌山市	明治 41 年	15
	屋根葺	檜皮葺師	昭和 52 年度	土井 定太郎	橋本市	明治 32 年	11
		檜皮葺・柿葺師	昭和 54 年度	谷上 伊三郎	橋本市	明治 30 年	17
		檜皮葺師	昭和 61 年度	堀 庄次郎	橋本市	大正元年	33
		文化財修理屋根葺士 (檜皮葺・柿葺)	平成 20 年度	谷上 永晃	橋本市	昭和 22 年	71
	建具	書院建具師	昭和 57 年度	荒川 武夫	和歌山市	明治 45 年	23
		建具工 (文化財保存修理)	平成 15 年度	東 浩美	和歌山市	昭和 19 年	61
	伝統建築保存修理	伝統建築保存修理	平成 19 年度	三塚 明	紀の川市	昭和 22 年	70
	石・金属加工品	灯ろう	灯ろうづくり	昭和 50 年度	若林 常太良 (号 常盤)	貴志川町 (現：紀の川市)	明治 16 年
刀		刀匠	昭和 51 年度	川上 敏夫 (刀銘 南紀川上童子清光)	那智勝浦町	大正 2 年	8
		刀匠	昭和 58 年度	安達 貞楠 (刀銘 龍神太郎源貞行)	龍神村 (現：田辺市)	明治 42 年	26
		刀研師	平成 22 年度	川上 安一	那智勝浦町	昭和 23 年	71
硯		那智黒硯製作	昭和 57 年度	山口 貞次郎 (号 光峯)	那智勝浦町	明治 31 年	25
		那智黒硯製作	平成 10 年度	山口 伊左夫 (号 光峯)	那智勝浦町	昭和 19 年	54
鍛冶		鍛冶職	昭和 60 年度	大川 啓	新宮市	明治 43 年	32
		鍛冶職	平成 2 年度	武内 文吉	御坊市	大正 3 年	40
		鍛冶職	平成 16 年度	大川 治	新宮市	昭和 11 年	63
鑄造		鑄匠	昭和 62 年度	大谷 善兵衛	橋本市	大正 10 年	34
食料品	茶	製茶(手もみ茶)	平成 18 年度	上村 誠	白浜町	昭和 24 年	67
その他	花火	花火師	昭和 55 年度	藪田 善一	吉備町 (現：有田川町)	明治 44 年	20
		花火師	平成 17 年度	藪田 善助	吉備町 (現：有田川町)	昭和 17 年	66
	レンズ	反射望遠鏡 レンズ製作	平成 10 年度	田阪 一郎	新宮市	昭和 4 年	53
	墨	紀州松煙墨製作	令和 4 年度	堀池 雅夫	田辺市	昭和 26 年	86

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（50音順）

	氏名	ふりがな	受賞年度	職業・分野	受賞時住所	生年	掲載ページ
あ	東 浩美	あずまひろみ	平成 15 年度	建具工 (文化財保存修理)	和歌山市	昭和 19 年	61
	安達 貞楠 (刀銘 龍神太郎源貞行)	あだちさだくす	昭和 58 年度	刀匠	龍神村 (現：田辺市)	明治 42 年	26
	荒川 武夫	あらかわたけお	昭和 57 年度	書院建具師	和歌山市	明治 45 年	23
い	池田 秀孝	いけだひでたか	令和 5 年度	紀州高野組子細工製作	橋本市	昭和 21 年	87
	石井 義夫 (竿銘 げてさく)	いしいよしお	昭和 56 年度	製竿師	高野口町 (現：橋本市)	大正 3 年	21
	伊東 昌造	いとうしょうぞう	昭和 58 年度	漆下地師	海南市	明治 35 年	27
	岩本 正幸	いわもとまさゆき	昭和 60 年度	川船設計製作	新宮市	大正 12 年	31
う	上中 喜代司	うえなかきよし	平成 2 年度	桐箆筒製作	和歌山市	昭和 8 年	39
	上道 益大	うえみちますお	平成 26 年度	松明製作	新宮市	昭和 8 年	78
	上村 誠	うえむらまこと	平成 18 年度	製茶（手もみ茶）	白浜町	昭和 24 年	67
お	大川 治	おおかわおさむ	平成 16 年度	鍛冶職	新宮市	昭和 11 年	63
	大川 啓	おおかわひらく	昭和 60 年度	鍛冶職	新宮市	明治 43 年	32
	大谷 善兵衛	おおたにぜんべえ	昭和 62 年度	鑄匠	橋本市	大正 10 年	34
	岡田 虎次郎	おかだとらじろう	昭和 55 年度	漆器木地師	海南市	明治 34 年	18
	岡田 昇	おかだのぼる	平成 4 年度	漆器木地師	海南市	昭和 2 年	43
	岡田 義正	おかだよしまさ	平成 12 年度	紀州桐箆筒製作	貴志川町 (現：紀の川市)	昭和 8 年	56
	奥野 誠	おくのまこと	平成 28 年度	紙漉き	田辺市	昭和 28 年	80
	小関 伊佐美	おぎきいさみ	昭和 63 年度	沈金師	海南市	大正 12 年	36
	尾上 徳治	おのうえとくはる	平成 3 年度	宮大工	高野町	昭和 5 年	41
か	片桐 順之助	かたぎりじゅんのすけ	昭和 51 年度	番傘づくり	海南市	明治 30 年	7
	勝股 文夫	かつまたふみお	平成 5 年度	紀州備長炭製作	南部川村 (現：みなべ町)	明治 6 年	45
	狩谷 英孝	かりやひでたか	平成 6 年度	船大工	美浜町	昭和 8 年	46
	河合 藤一郎 (改名 篤亮)	かわいとういちろう	昭和 49 年度	蒔絵師	海南市	明治 3 年	1
	川上 敏夫 (刀銘 南紀川上竜子清光)	かわかみとしお	昭和 51 年度	刀匠	那智勝浦町	大正 2 年	8
	川上 安一	かわかみやすかず	平成 22 年度	刀研師	那智勝浦町	昭和 23 年	74
く	久世 清吾	くせせいご	平成 15 年度	漆器沈金師	海南市	昭和 12 年	62
	久保 博義	くぼひろよし	平成 24 年度	能面師	和歌山市	昭和 15 年	76
	栗林 つね代	くりばやしつねよ	平成 21 年度	手漉き和紙 「保田紙」製作	有田川町	大正 14 年	73
	桑添 勇雄	くわぞえいさお	平成 19 年度	棕櫚箆製作	紀美野町	昭和 3 年	69

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（50音順）

	氏名	ふりがな	受賞年度	職業・分野	受賞時住所	生年	掲載ページ
さ	雑賀 彰	さいかあきら	昭和54年度	らんま製作	和歌山市	明治41年	15
し	志賀 啓二	しがけいじ	令和元年度	紀州桐箆笥製作	和歌山市	昭和24年	83
	芝 安雄	しばやすお	昭和53年度	民芸品製作	本宮町 (現：田辺市)	大正10年	12
	城 純一 (竿銘 魚集)	じょうじゅんいち	平成13年度	製竿師	橋本市	大正14年	58
	新堀 武夫	しんぼりたけお	昭和57年度	表具師	かつらぎ町	明治45年	24
	新家 虎雄	しんやとらお	平成9年度	木工品制作	高野町	大正10年	52
た	武内 文吉	たけうちぶんきち	平成2年度	鍛冶職	御坊市	大正3年	40
	田阪 一郎	たさかいちろう	平成10年度	反射望遠鏡レンズ製作	新宮市	昭和4年	53
	田中 正助	たなかしょうすけ	昭和51年度	人形づくり	御坊市	明治40年	9
	田邊 正義	たなべまさよし	昭和54年度	漆塗師	海南市	明治44年	16
	谷岡 敏史	たにおかとしふみ	平成25年度	漆塗師	海南市	昭和13年	77
	谷上 伊三郎	たにがみいさぶろう	昭和54年度	檜皮葺師・柿葺士	橋本市	明治30年	17
	谷上 永晃	たにがみながてる	平成20年度	文化財修理屋根葺士 (檜皮葺・柿葺)	橋本市	昭和22年	71
	玉井 又次	たまいまたじ	平成14年度	紀州備長炭製炭士	日置川町 (現：白浜町)	大正15年	59
	玉置 フミ	たまきふみ	平成8年度	人形づくり	和歌山市	大正9年	50
	玉置 茂市	たまきもいち	平成5年度	桶製作	粉河町 (現：紀の川市)	明治45年	44
つ	辻本 喜次	つじもとよしつぐ	昭和52年度	宮大工	高野町	大正2年	10
	津田 満雄 (竿銘 至峰)	つだみつお	平成18年度	製竿師	九度山町	昭和4年	68
	津本 晴の	つもとはるの	昭和62年度	保田紙手漉	清水町 (現：有田川町)	明治40年	35
て	出口 譲爾	でぐちじょうじ	平成8年度	加飾（蒔絵）	海南市	昭和9年	51
と	土井 定太郎	どいさだたろう	昭和52年度	檜皮葺師	橋本市	明治32年	11
な	仲 完	なかたもつ	平成14年度	船大工	那智勝浦町	大正15年	60
	中坊 君子	なかぼうきみこ	昭和59年度	高野紙製作	九度山町	明治40年	29
に	西畑 猛	にしはたたけし	平成20年度	紀州桐箆笥製作	和歌山市	昭和14年	72
	新田 義雄 (号 紀雲)	にったよしお	平成11年度	唐木指物師	有田市	昭和19年	55
	新田 隆造	にったりゅうぞう	昭和53年度	唐木指物師	有田市	明治44年	13
の	野田 信男	のだのぶお	平成16年度	松明・扇神輿製作	那智勝浦町	昭和23年	64
は	橋爪 靖雄	はしづめやすお	平成27年度	漆芸家	海南市	昭和10年	79
	橋本 恵一	はしもとけいいち	平成6年度	表具師	田辺市	昭和7年	47

和歌山県名匠表彰受賞者一覧表（50音順）

	氏名	ふりがな	受賞年度	職業・分野	受賞時住所	生年	掲載ページ
は	長谷川 時和	はせがわときかず	平成7年度	木製家具製造	海南市	大正13年	49
	濱野 榮二郎 (号 等等人)	はまのえいじろう	昭和58年度	蒔絵師	海南市	明治34年	28
	羽山 直幸	はやまなおゆき	平成17年度	表具師	由良町	昭和6年	65
	原 幸男	はらゆきお	令和3年度	紀州備長炭製炭士	みなべ町	昭和13年	85
ひ	日野 常	ひのじょう	昭和53年度	表具師	那智勝浦町	明治26年	14
ふ	福形 崇男	ふくがたかお	平成29年度	位牌文字彫刻	高野町	昭和23年	81
	鮎田 武彦	ふなだたけひこ	昭和56年度	指物師	新宮市	大正2年	22
	古田 龍雄	ふるたつお	平成7年度	大松流有田かご製作	中津村 (現：日高川町)	明治37年	48
ほ	堀池 雅夫	ほりいけまさお	令和4年度	紀州松煙墨製作	田辺市	昭和26年	86
	堀 庄次郎	ほりしょうじろう	昭和61年度	檜皮葺師	橋本市	大正元年	33
ま	松之平 義治 (号 松芳)	まつのひらよしはる	平成12年度	紀州漆器木地師	和歌山市	昭和3年	57
	松本 濱次	まつもとはまじ	平成30年度	桶製作	田辺市	昭和9年	82
み	御前 隆	みさきたかし	昭和59年度	三味線製作	和歌山市	明治41年	30
	三井 智文	みついのりふみ	昭和55年度	宮大工	岩出町 (現：岩出市)	大正4年	19
	三塚 明	みつづかあきら	平成19年度	伝統建築保存修理	紀の川市	昭和22年	70
	宮嶋 正太郎	みやじましょうたろう	昭和50年度	らんまづくり	和歌山市	明治29年	4
む	村木 弘育	むらきひろやす	平成23年度	表具師	高野町	昭和18年	75
も	杵 真藏 (旧姓 佐藤)	もくしんぞう	昭和49年度	宮大工	田辺市	明治34年	2
や	藪田 善一	やぶたぜんいち	昭和55年度	花火師	吉備町 (現：有田川町)	明治44年	20
	藪田 善助	やぶたぜんすけ	平成17年度	花火師	吉備町 (現：有田川町)	昭和17年	66
	山上 寛恭	やまうえひろやす	令和2年度	製竿師	橋本市	昭和27年	84
	山上 文雄 (竿銘 山彦)	やまうえふみお	平成元年度	製竿師	橋本市	大正10年	38
	山口 伊左夫 (号 光峯)	やまぐちいさお	平成10年度	那智黒硯製作	那智勝浦町	昭和19年	54
	山口 貞次郎 (号 光峯)	やまぐちていじろう	昭和57年度	那智黒硯製作	那智勝浦町	明治31年	25
	山田 岩義 (竿銘 源竿師)	やまだいわよし	昭和49年度	製竿師	橋本市	大正元年	3
	山本 軍治	やまもとぐんじ	昭和63年度	表具師	田辺市	大正10年	37
	山本 幸太郎	やまもこうたろう	昭和50年度	獅子頭づくり	御坊市	明治36年	5
わ	若林 常太良 (号 常盤)	わかばやしつねたろう	昭和50年度	灯ろうづくり	貴志川町 (現：紀の川市)	明治16年	6
	和田 年晴	わだとしはる	平成3年度	漆塗師	海南市	昭和3年	42

和歌山県名匠表彰 50 年の歩み — 歴代受賞者の功績 —

令和 6 年 3 月発行

和歌山県企画部企画政策局文化学術課